

---

# 医者の俺は異世界で聖書（スマフォ）を片手に神と呼ばれる。

Dr\_ロツテ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

医者スマフォの俺は異世界で聖書を片手に神と呼ばれる。

### 【Nコード】

N2069W

### 【作者名】

Dr | ロッテ

### 【あらすじ】

疾患により若くして医者を諦めたドクター。薬に汚染され、脱落していく日々に、ツリーという少女が現れる。ドクターは彼女に誘われるがまま、見たこともない生き物が住む砂漠の世界へ足を踏み込んでいく。

ドクターはその世界で蔓延している呪い（病気）を、己の知識とスマフォで解決していき、徐々に自信を取り戻していく。しかし踏み込めば踏み込むほど、現実が嘘の世界に汚染されていく。自分  
は一体何故この世界に招かれたのか。その謎を探り続けるドクター。

ドクターは果たして現実に戻れるのだろうか。

「命を救うためならなんでもすると言ったな。  
ぱい触らせてください」

じゃあおっ

## KARTEO（前書き）

医療に関する記事が数多く含まれていますが、いかなる記事もその正確性はまったく保証されていません。いかなる記述も、それが真実である、正確である、最新である、という保証は一切ありません。記事は専門家ではない素人によって執筆されています。たとえ医療に関するある記述が正確であったとしても、それがあなたまたはあなたの症状には当てはまるとは限りません。（Wikipedia：医療に関する免責事項より引用）

## KARTEO

甲状腺機能障害の患者を三連続で診断させられたような青ざめた朝。

一過性脳虚血発作を起こし、腸間膜動脈血栓症に痛めつけられ、肺血栓症で呼吸も重たく、体の節々からプロスタグランジンと、ロイコトリエンと、トロンボキサンが発生しているようなけだるさ。人生で眠ることほど苦痛なものはない。

こんな寝起きを必ず迎えなければならぬのだから。眠りにつく恐怖は耐え難い苦痛だ。

始めに言っておく。これからする話は、結論だけ言えば大したものじゃない。

俺がいかにくつすり眠れるかどうかの話だ。

不眠症の医者が現場復帰のリハビリを受ける話なんだ。

さあ朝になった。

頭を殴りつけて目を覚まし、俺は病院へ行く。

行って、ばたと倒れた。今日の俺は便器に顔を突っ込みながら倒れている所を発見され、気がついた時には夜勤用の仮眠ベッド（ソファ―）に昼間から横たわっていた。

そんな俺に待っていたプレゼントがある。予想通りの首切り宣告だ。

「もうそんな体じゃ仕事できないでしょう」

医局が並ぶ廊下で、医局長が俺の肩を叩く。

俺の腕は忙しく揺れていた。ペンすら握れないほどだった。

始まりは突然の不眠症。眠りは浅く、寝起きは激痛。

時折めまいや頭痛がする。手に痺れが走る。いわゆる鬱病の典型例だった。

「仕事を頑張りすぎたんだ。もうやめたほうがいい。私の知り合いにいたんだ。そのまま続けて、結局自殺したやつが。リタリンがな

いと診察できないやつもいた」

リタリンは精神刺激剤と呼ばれ、日本においては薬品だが、世界的に言えば覚醒剤である。そんな薬を飲み続けたらどうなるか。想像は容易い。

「残念だけどしばらく休みなさい。元気になったら研修だけ終わらせればいい」

「はい……」

「そうだ。どうだい、医療関係者向けのカウンセリングがあるんだ。……なんだ、乗る気じゃないね。いいかい、忠告しておく、参加したまえ。病気を一人で悩んじゃいけないよ」

「……カウンセリングってなにをやらされるんですか」

「さあ。でも結構人気で、話によるとカウンセリングプログラムを受けるまでかなり待たされるらしいよ。参ったね。そんなに支援が必要な医者がごろごろいるなんて」

振るえる手を抑えながら、俺は小さくはいと返事をした。

参加するのだけ伝え、俺はとりあえず世話になった建前上、一度だけそのカウンセリングとやらの説明と手続きを受けたが、だいぶ待つとか言われ、それっきり行かなくなった。

それが約二年前の話だ。

上司の忠告を守って、律儀にカウンセリングを受け続けておけばよかったと後悔しても遅すぎた。再び受けようにも、職場の人間はすでに俺のことなど忘れているだろう。

今の俺は……、なんだろうな。

就労不能の診断書により、生活保護を受けて生き延びている。

手指振戦は未だに治らない。(意図しない手の振るえ)

リタリン依存にはならなかったが、抗うつ剤のパキシルの離脱症状(薬が抜けた後の依存症)に悩まされ、結局酒に逃げた。酷い時は布団の中で大量の失禁をしたと自覚しながらも、一時間起き上がれなかった。典型的な鬱病患者の末路を辿っていた。

俺はこんな生活をくり返している。

寝起きは今でも最悪だ。

どうにか目を覚まそうと顔を洗っても、そこに写る顔は俺の顔ではなかった。

無意味で無価値なのっぺらぼうである。

俺ではない。誰でもない。なんの意味もない顔である。

突然顔がすり替わったとしても、誰ひとりとして困らない。

生きている意味など忘れてしまった。

ただ死ぬのもおっくうだから死んでいないだけである。

俺は暗い家の中で、ひたすら時間が流れるのを待っていた。

八畳の1DK。肌色のカーペットは、全ての毛が寝込み、立派な硬さを保っている。

万年床の寝床、テーブル、片付ける事を忘れられた山積みの本棚。玄関から入れば、左に細長い台所と、右にトイレ共同のバスル―

ム。

黒カビが窓際にたまっている。

外へは一切出ない。

玄関を開け、外に出るのがおっくうだった。いや、怖かった。

そんなゴミ溜めみたいな空間で毎日を過ごしていた。

二年も経てば症状こそ軽くなったものの、医者には戻れない。

病気が再発するのが怖くて、歩き出すことができない。

常に一人。この暗い部屋で過ごす。

いいや、正確に言うと、ある時から、俺は一人ではなくなった。

この部屋には、もう一人の住民がいる。

『おはようございます、ドクター』

一人の少女が俺に話しかける。

背の低い綺麗な女の子。

身長が一〇センチ前後。だらっと伸びた金髪が、ふくらはぎまで続いている。

白い素肌に、一枚の白いワンピース。

清楚感溢れる見た目でありながら、どこか不気味だった。

眠たそうな目蓋は、半分だけ開いて、半分だけ閉じている。  
眉毛や口元が動くのに、目だけは微動だにしない。

「やぁおはよう」

俺は寝たまま少女に返事をした。もちろん英語で。  
彼女は俺の嫁である。なお、現実には存在しない。

この少女の存在は嘘である。

薬に依存し、ともに動けなくなり始めたころ、いつしか現れる  
ようになった。

人によつては、存在しないネズミがそこらじゅうを這いずり回つたり、人の目が壁から出てきて常に自分を監視しているとか、恐ろしい幻覚を見るようだが、俺が見ている幻は比較的優しいものだった。

『愛しのドクター。今日も診療に向かわれますか？』

あまりにも透き通つた、感情のかけらもない女性の英語。

穏やかな囁き声は、睡魔を催すほど心地良かった。

飴でも一つほおばりながら喋っているまどろっこしさを持ちながら、とても美しくセクシーな声だ。ただし、イントネーションはどこか外れ、さながら文章自動読み取り音声である。

「今日は気分が良くないんだ……」

『外の新鮮で埃臭い空気を吸えば気分も変わります。こちらの埃臭くかび臭い空気よりは身体的負担も低いでしょう』

聞いているだけで、心拍が下がる声。

形も掴めず、水飴のように透き通りつつ、どろっとしている。

『これはテスト（試練）です。テストはドクターのためです。そして私はドクターのために存在しているのです。テストを乗り越えなければ優秀な医者になれません』

実に心地良い声だ。

人に安らぎを与える、色っぽい声。

彼女に急かれ、俺はしぶしぶ起き上がった。  
服を着替え、充電していた電話を取る。

まだ働いていた時に買ったスマートフォン。

これが俺の仕事道具である。

感覚のない手で掴んで、懷にしまう。

『さあ、始めましょう。人類のためにもね』

彼女の名前はツリー。

とても頭が切れ、俺を常に助けてくれる。

最高の嫁であると断言できる。

俺はツリーと一緒に、医者としてのリハビリプログラムを行っている。

## KARTEO（後書き）

本原稿は既に完結された原稿があり、それに少々の手を加えて投稿しております。ようは賞落ち物ってやつです。

## KARTE 1 - 1    どこかの砂の上

俺がツリーと初めて仕事をしたのは、数ヶ月前のことだった。  
そこは砂漠だった。

周囲を見渡せば、青い空。赤い地面。赤い岩肌。  
遠くを見ても、赤い砂丘がそびえるだけ。

文明的なものはない。

高い気温と低い湿度は日本の夏よりも涼しいものの、気温は明らかに高い。

以前俺は留学中に観光旅行のつもりでアメリカ中部を車で走ったことがある。あの時の光景によく似ている。

しかしなぜ俺がこの場にいるのか、とは思いつけない。

歩いてきたのか、車で来たのか、飛行機できたのかすらわからない。

ツリーがあそこは日差しが強いですからこの眼鏡をかけてくださいと言つて、出された細長いサングラスをかけてみたら、ここにいた。

つまり俺は今わけのわからない世界にいる。

現実なのか、夢なのか、幻聴なのか。

頭が混乱してきた。皮膚をつねってみても痛いだけ。

いぜん俺はここにいる。

昔抗精神病薬と酒を一緒にあおるという自殺まがいを行ったとき、  
緑あふれる山奥で意識を取り戻したことがある。自分がなぜここにいるのか。ここはどこなのか。どうやってきたのか。考えても考え  
てもわからなかった。

あの時に似ている。

ここは夢なのか、現実なのか。

いくら考えてもわからない。

しかしなぜか、やることはわかっていた。

なぜわかっていたのかについては、この時点ではまだわかっていなかったが。

『ドクターは現在若い夫婦が二人きりという状況をどう捉えますか？ 愛を営むシチュエーション？ いいえ、残念ですが、これから始まるのは診療という仕事なのです』

かたわらにいますツリーはこんなこと言っていた。

どうも俺に診療させたいやつがいるらしい。

俺は汗だった。俺が倒れそうである。

しかしツリーは汗一つ滲ませない。涼しげな顔で歩いている。

まあ、こいつの顔が涼しげじゃなかったことなんてないのだが。

「その診療をすると、俺になんの得がある」

『もちろん。このテスト（試練）を乗り越えることは全てドクターのため、ひいてはご褒美となります』

「……家に帰れるご褒美はないのか」

『ああ。終わった後に』

「もうすでに辛いんだ。テストってやらを乗り越えられる気がしない」

『確かに困難なテストは、危険や激しい痛みを、死ぬか死なないかのギリギリの範囲で繰り返し提供してくれます。問題解決のため、時には自らの身を引き裂き、命を落としかける時もあるでしょう。』

しかしそんな時こそ、愛する私を思い出してください。共に乗り越えられます』

ツリースマイル。

目元を動かさず、口元だけににんまりする不気味な笑顔。

『さあ、まもなく来ます。最初のテストが』

ツリーが遠くを指さす。

指の向こうには、砂漠の熱で揺れる人影があった。

人影は徐々にこちらに近づいてくる。

そうして俺の目の前に来るやいなや、跪いて大きく叫んだ。

「ああ神よ！」

詰めた声が飛んできた。

「お願いします。私の村を、私の村をつ！ 呪いから救ってください！」

可愛らしい女性の声。

しかし彼女は人間ではなかった。

後ろ一本に縛られた長い髪は、鮮やかな緑色をしていた。青々とした笹の葉というか、むしろ葉そのものというか。

肌は容赦なく真っ白い。

先天性白皮症なんてもんじゃない。白カブが大根みたいに真っ白だった。

長い前髪に片方隠れた瞳。大きな赤い眼。人間とは違う、昆虫的な瞳だ。

アメリカ人が好みそうな、人とエイリアンが交じった風貌である。俺が学生時代によくやっていた洋ゲーに出てきそうである。

この世界はゲームなのか？

「なんだ。俺は……、俺は、ここじゃ神って設定なのか？」

『この個体がそう思いこんでいるだけです』

ツリーが簡素に答える。

この個体である彼女は、トシユナと名のつた。

俺に向かって、大泣きする勢いで話しかけている。そう、俺だけに。

どうもツリーが見えるのは俺だけのようだ。

ツリーが俺だけにしか見えない嘘の存在であるのは間違いない。

トシユナは自分の村の状況を、深刻な面持ちで訴え続けた。

村の抱える問題を解決することが、テストの目的なのだろうか。

「一つ二つ質問して良いか。呪いとはどんな呪いだ」

「子供だけがかかる呪いです。血の涙を流しながら、呪われた半分ほどが死んでしまう恐ろしい呪いです」

「血の涙ね。で、あんたどうして俺が神だと思っただ？」

「そうお告げがありました。今日この時、ここに神が参られると。」

もし我々の命を救っていただけるのであれば、私はなんでもいたします。この身と血だけでなく、村の家畜の首を十ほど捧げましよう」

「いや家畜の首は貰ってもぜんぜん嬉しくないんだけど……」

俺は跪く彼女を見下ろした。

顔は人間に近いものの、人間ではない。

しかし体つきはとも人間である。しっかりとした肉付きの良い体。

豊かな胸は、たった一つで俺の顔の体積さえ超している。

その体を、スカスカな銅鉄の装飾品が微妙な面積を隠している。

布や絹ではない。磨かれた銅鉄が、ビキ二のような形でじゃらじゃらと肌にくっついていてる。

その姿を見るや、実に鑑賞深いものがあつた。

「命を救うためならなんでもすると言ったな」

「はい、もちろん」

「じゃあおっぱいさわらせてください」

トシユナは「はあ」と頷いた。

体を触られるのに抵抗はないと思えるほど、あつさりしていた。さっそく手を伸ばしてみる。

白い腹に触れ、もそもそと皮膚を撫でる。

表面は冷たく、汗が滲んでいる。

金属の装飾品の下から手を忍ばせ、二つに実った肉塊を揉んでみる。

片方でキログラム単位の重量測定ができる。

そして人間のものよりいくらか張りがあつて、ゴム鞠のような硬い感触だった。

うゝん。これは凄い。素晴らしい。

この重さ、例えばどれほど重くとも、一切苦にならない重さだ。

「よし。わかった。ただ言っておくが、俺は神様じゃない。ドクタ―だ」

「はい、ドクター」

「天変地異なんかの相談は受け付けないが、病気なら任せなさい」  
どうせ呪いって言っても、実は病気かなにかだ。

俺は村に向かって歩き出した。

風と、臭いと、暑さを感じながら。

だるけからか、まるで夢の中にいるような感覚だった。

もしかして寝ているのではないかと思っってしまうぐらいに。

不眠症による幻覚に慣れていると、現実と嘘の境目がわからなくなるから困る。

## KARTE 1 - 2 呪われた村

俺は砂漠を歩き続けた。

どういうわけか知らないが、確かに歩いていた。

弱り切った足腰をひきずりながら、一キロ近く歩いたのだ。

高低差と暑さと辛さを感じながら歩いたのだ。

やはりこれは夢なのか。酷い幻覚と妄想なのか。

なにが正しくて、なにが嘘なのか判断がつかない。

砂丘の上に立ったトシユナが前方を指さす。

オアシスを囲んだ場所に、原始的な集落が見えた。

集落は不自然なほど緑に包まれ、サッカーや野球をやるには最適といえるほどの芝が生い茂っていた。もちろんオアシスを少しでも離れれば砂漠である。

俺が目指す場所はある村か。

砂丘を降りて、集落に着く。

小さな淡水の湖のまわりを、木々と家々が囲んでいる。

恐らく地下水が湧き出ている、その周囲に植物と生き物が住み着いたんだろう。

少なくともここは日本じゃない。

アメリカでもない。中東アジアっぽさはある。

アフリカ……、は行ったことないからわからん。もしかしたらあるかもしれない。

家は全て岩を砕いて乗せ、隙間をワラや固めた土で埋めたものだった。指で壁をなぞってみると、ぱらぱらくずれた。質は酷い。ともかく現代じゃない。

屋根はワラと乾燥した竹造り。竹家とはさらにアフリカらしい。

電柱や配線がないどころか、水道すら見当たらない。

発見できた水道設備はでっかい水ガマぐらいだ。

舗装されていない地面は、歩きたびにぐじゅぐじゅと泡を立て

た。

前日に雨が降ったというよりは、排水設備がまったくできていないだけに見える。

そこにトシユナと同じ植物人間が生活していた。

みんなそのデカイ目玉で、俺を物珍しそうに睨んでいた。

「神様ですよ、ほら、本当に来たんですよ」

嬉しそうな様子で語るトシユナに、歪んだ瞳を向ける住人達。

どうも地域をあげて俺を歓迎しているわけではないらしい。

「あのお告げは間違いじゃなかったんです」

トシユナはにこにこしながら周囲に説明しだした。

どうもお告げというのは、村人全員にあつたようだ。

『彼らにあなたの存在を知らしめたのは私です』

横をひたひたとついて歩くツリーが、自慢げに答える。

お前かよ。

『彼らに愛するドクターに捧げる困難を用意させるため、文化レベルが極めて浅はかな彼らの価値観にあつた嘘を吐いたのです。……

なんですかその目は。ああ。嘘がお好みでなければ、これ以上嘘を吐くのをやめましょう。医者だから嘘がお好きかと思つたのですが、ドクターはまじめなのですね』

ツリーが真一文字に口を閉じ、小さな指先でなぞつてチャックをした。

嘘くせえ。

まあ本気で信じていたのはトシユナだけみたいだが。

酒と肉と踊りで歓迎されるもんだと思つて、ほいほいついてきた俺がバカだった。

「ドクター。こちらです」

トシユナが一軒の家の前で立ち止まり、手を差し伸べる。

馬小屋に近いボロ小屋である。

どうやらここに呪いで苦しむ子供たちが隔離されているらしい。

「ここに入れって？　なんかすげえ臭いけど」

「他の土地からやってきた採薬師が、呪いの苦痛から開放される術を使っております」

「じゃあその採薬師にこの件は任せようじゃないか。な？」

正直いうと、俺は帰りたい気持ちでいっぱいだった。

見知らぬ土地、見知らぬ生物、敵対的な視線。

なにをとつても不安要素だらけである。

「ダメです！ その薬師さまは、もう子供らは死ぬしかないとおっしゃってます」

トシユナの瞳がうるつと薄い涙につつまれた。

まあ死なせたくない相手がいるんだろう。

俺は喉を鳴らして、きつぱり断るのを渋った。

泣かれる相手には弱い。

「しょうがないな。いいよ、困っている人は助ける主義なんだ、俺は」

俺はとりあえずこのいかかわしい建物にはいった。

ああしかし最悪だ。

ひつでえ臭いだ。

クソのひつついた真夏の公衆トイレに入った方がマシなほどである。

なんてたつてこの建物、謎の香料が焚かれているらしく、それがくせえのなんの。

お香だとかアロマセラピーっていうレベルじゃない。香水を点けすぎた女が電車の横の席に座ってきた気分だ。しかも両サイドに。誰が進んで入りたがるってんだこんなところ。

俺は腕を鼻に当てたまま、薄暗い建物の中に入った。

中には赤ん坊たちがベッドに並んで眠らされていた。もちろん赤ん坊っていつても、まるつきり白い肌なんだが。頭に葉が生えていないと、ますます白カブである。

臭いは中に進むほどひどくなっていく。

よく見りゃ小便垂れたまま子供が放置されてる。

臭いもそうだが、こんな衛生状況じゃなんの病気が発生しても知らないぞ。

「なんじゃ、お前は」

奥の明かりにつれられて進むと、そこには小さなばあさんがいた。俺の腰ほどしか伸長がなくて、顔なんか乾かしたボロ雑巾よりしわくちゃだ。

ぎよろつとした目は、馬みたいに横付き。耳は長く垂れ下がり、まるでロバみたいである。しかしトシユナよりはいくらか人間らしさもある。今更驚きやしない。

どうやらこいつが採薬師らしい。

「俺はトシユナって子につれてきた。あんたがここのボスか？」

「わしは神聖なる術を使う、神の使いじゃ」

正面向かって喋るボロ雑巾ババアを目の当たりにした時、俺は驚いた。

やつは口でなく、喉で喋っていたのだ。

ロバの口腔部は、くっちゃくっちゃと動物的に動き、言葉を発しない。

言葉は少々膨れた喉が横に開き、そこが人間の口のように働いて音を出している。良く見ると喉に舌まで存在している。気持ち悪いったらありやしない。

「ここの子供らはみな悪魔の呪いにかけられ、血の涙を流しておる。いまや死を迎えるばかり。お前にやれることなどありはせん」

「血の涙ねえ」

俺はばあさんの喉をひとまず横に置いた。

ためしに赤ん坊の一人を見てみると、確かに目が赤くなっていた。眼球結膜の充血である。

血管の一本一本が肉眼で数えられるぐらいに充血している。

「だからワシは、せめて苦痛から逃れられるように薬草を与えておる」

ばあさんは乾燥した緑色の粉薬を持っていた。

俺がこれの原料はなにかと尋ねると、ゴルフボール大の植物が出てきた。

砂漠地帯よろしく、サボテンの身みたいである。

小さなミニカボチャにトゲがくつついているような。

しかしなにか薬の本で見た覚えがあるぞ。

俺はそのサボテンをまじまじと見た。

うーん。なんだったっけかな。

『物語で主役が困ったとき、必ず助けるヒロインがいるべきだと思いませんか？』

頭を抱えていると、ツリーが小さく手を振った。

『ヒロインは主役の人生を、よりダイナミックに魅力的にしてくれるでしょう。そしてドクターの人生において、ヒロインは私です』

口元だけにんまりとしていやがる。

『もし私があなたにとって重要なヒロイン、かつ、人生においてのパートナーだと認めれば、効果的な情報を出しましょう』

重要なヒロインがパートナーに情報の駆け引きをするなよ。

と怒るわけもなく、俺は極めて大人な態度を取った。

「ああわかったわかった。ツリーは俺にとって大切だよ」

『ポケットに忍んでいる粗末な端末をお取りください』

俺は言われるがまま、右手を突っ込み、中に入っていたスマホを取り出した。

『カメラを向けると、対象の関連情報がわかります』

なんだって？ それは……、おもしろそうだな。

やはりゲームなのか。

嘘の妄想の世界なのか。

俺はさっそくサボテンもどきにカメラを向けた。

こうやって情報を仕入れて、ゲームを有利に進めていくんだな。

「なんじゃ。なにをしておる」

「いや、きにすんな。 ああ、ひとつ聞いていいか。もしかしてこれを儀式かなにかの時に使って、神のお告げを聞いたりするのか

「？」

「そうじゃ。さすがにそのぐらいはお主も知っておるか」

現物を手に取ってみる。

正体がわかったと同時に俺は小屋を飛び出た。

そろそろこの臭いに付き合うのも限界があつた。

「どうですか。ドクター、なにかわかりましたか」

咳き込む俺を、トシユナが心配そうにながめている。

俺はサボテンをトシユナに見せた。

「ペヨーテだな、この薬は」

「ペヨーテですか？ それはどのようなものなんでしょう」

「複数のアルカロイドを含んでいて、主成分はメスカリン。フェネチラミン系の幻覚剤だ。効果は薄いけどね。ようは体を治すんじゃない、体をもっとイカれさせて、痛みや苦しみを紛らわせてるだけなんよ」

幻覚剤とは恐ろしい響きだが、医者としてあのばあさんの弁護をしよう。

幻覚剤つてもものも、古くは医療道具の一部だった。

昔は麻酔なんてものがなかったから、大麻で手術の苦痛を抑えるようにしていた歴史がある。現に太古の手術記録がある国は、大麻の生産地でもあつた。

大麻は昔の医学の発展に役立つ薬だった。

それに麻酔も、そもそも麻薬の類だ。

だからこんな文明のなにもないような場所じゃ有効な薬なんだろうが。

「あんなんじゃ患者は死ぬぞ。おい、何人かここに出してきてくれ。診察しよう」

俺はトシユナに指示を出した。

確かにこの世界の医療じゃ幻覚剤が有効かもしれない。

だけどな、俺は現代医療の医者だ。

パツと見たただけだが、あれは呪いじゃない。生理反応だ。

もし体内が人間と似た構造ならば、なんらかの疾患による反応だ。  
あんなまじないもどきの医術なんかぶつとばしてやる。

## KARTE 1 - 3 私 は 医 者 で す

「準備できました」

トシユナが小さな子供を抱えて、計三人、それぞれ地面に敷いたワラの上に寝かせた。

衛生状況が完璧とはいわないが、少なくとも糞尿まみれよりはマシだろう。

さてでは診察に入ろう。

『彼らの診察には、その粗末な端末を利用してください』

ツリーがスマホを指さす。

言われた通り操作してみる。メニュー画面には、アイテム、ステータス、シヨップなどのゲームとして見慣れた項目があり、スキルの項目には画像撮影診断もあった。

ますますゲームっぽい世界だ。

が、残念なことに放射線画像撮影は有料制であった。

金はなし。

アイテム欄はからっぽ。

シヨップでなにかを売ることもできやしない。

「金はないのか。なんにもできないぞ」

『金銭は彼らから物資を得て、換金してください。得る方法はドクター次第です。説得、交渉、窃盗、殺人、手段はさまざまです。ただし彼らは暴力的手段に対し、一様の抵抗を示すので注意してください。もし捕まった場合、彼らが文明的な裁判を行うとは限りませんよ』

結局診察料を上手く取れってことだな。

どこぞのゲームじゃ魔王を倒す勇者にも少々のゴールドと棍棒をくれるもんだが、貧相な村の子供を救う医者にはなんにもくれないんだな。

しかたない。俺の知識だけで対処してみるか。

三人はどれも目の充血がひどかった。

他の大人達がこれほど真っ赤になっている様子もない。

充血は症状と見てまちがいないだろう。

「唇がやけに赤いな。ここの地方の人間はみんなそうなのか？」

「いえ。ここに入れられた子供たちだけです」

「うゝん。舌にもぶつぶつがあるな」

確かにトシュナを見る限りだと、この子供みたいな唇の赤さはない。

むしろ唇も真っ白けだ。

舌こそいくらかの赤みはあるものの、こんなぶつぶつはない。

「この発疹は……、日焼けに弱い体質か？ トシュナ、お前はどうか」

「ほっしんとは？」

「ほら見えるだろ、この肌のブツブツだよ。これが体質によるものか、それとも病気のせいなのか」

しかし彼女に発疹などはなかった。

「ドクターは既にこの呪いがなんであるかご存じなのですか？」

「まあだいたい検討はつくんだが……」

俺の頭には一つの答えがあった。

乳幼児によく発症し、死亡する例もある。

症状も似ている。

そんな病気がある。

だが俺は結論を出せなかった。

詳しい検査をしなきゃ断定はできない。

それに人間の病気がこの人種に当てはまるかわからない。それは確かだ。

なにより答えが俺の咽から先に出てこないのは、感染被害を起こしている点にある。

俺の記憶の中にある犯人は、この子供らと極めて似た症状でありつつも、通常は感染被害を起こさない。

いや、それは衛生のきちんとした日本だから報告されないだけだろうか。これだけ衛生の概念のない場所なら、被害が増えるのかもしれない。兄弟で発症した例ってのもあるらしいから、一丸に感染しないとは言い切れないし。

けどこれほど強く感染するはずがない。

いや、世界が違うんだ。

似ている菌でも、感染力が強かったりするんじゃないか？

ああ、そもそも菌なのか？

地域流行性を起こしているから、何らかの感染だという示唆は間違っていないと思うが。

医学は命をかけた謎解きだ。

俺は激しい原因救命欲求に襲われた。

利益も理屈もないのに、なぜだか解決してみたくなった。

なぜ俺の頭がこんな衝動に駆られるのか、この時はまだわからなかった。

今はただ、ひたすらに彼女を救いたかった。

理屈のない夢の中で、理屈のない行動をするかのごとく。

だから答えの確信が欲しかった。

「ところでこつちの子供だが……、硬性の浮腫がみれるな」

「硬性の浮腫とは？」

「ほらこの手、ぱんぱんに腫れてるだろ。押してもへこまない。例えばそうだな、歩き疲れた時に足がむくんでパンパンに腫れることってないか？」

「あ、あります」

「そんな時は押すとへこむが、これはへこまない。蜂に刺されたみたいにな。それが硬性浮腫だ。あとそれからこつちは手足の皮がむけまくってる。これであんなクソまみれの場所にいたらなんの感染を起こすかわかったもんじゃないぞ」

俺は三人の子供をすみずみまで眺めた。

俺が今考えている答えは、ほぼ間違いない。

昔は突発死を起こす恐ろしい病気だったが、俺の現代医学にすりやまず助かる病気といえる。

が、強烈な感染力が納得できない。

俺は決断できずにいた。

感染型として新定義すれば、治療法はわかる。薬は効くかどうかわからない。

しかしこのままだと、きつとこの子供らは死ぬ。

「あの、ドクター、この子供が」

俺が脳みそをフルに動かしていると、意識の外からトシユナの不安げな声が飛んできた。

見ると一歳児ぐらいの子供が胸膝位で振るえていた。（胸と膝が付く姿勢。この姿勢を取ると神経の圧迫が和らぐ）

俺は即座にスマホを向けた。

患者のカルテが画面に出力される。

カルテに表示されたBP（血圧）が異様に減っている。

CKは2200と最悪の数値。（CKはクレアチンキナーゼといい、筋肉内にある酵素である。正常値はこの十分の一以下でよく、CKが異常に増えたということは、筋肉が破壊され、CKが外に放出されているということでもある）

俺は飛びついて子供を拾った。

念のため、胸に耳を近づける。

心音が明らかに弱い。

予想でしかないが、きつと冠動脈障害から起きた急性心筋梗塞だ。俺は子供を膝に置き、頭を逆さまにして、胸を指三本で押した。

乳幼児の心臓マッサージは手の平でやらない。

優しく、そして大人より早く、胸の厚さがぐつとくぼむまで押す。恐らくこの子供は心筋（心臓の筋肉）の血管である冠動脈に障害を起こし、心筋が動かなくなる心筋梗塞に陥った。

正座をしすぎた足が動かなくなるように、血が通わなければ体は動かない。そして心臓を動かす心筋に血が通わず、心臓が動かなく

なるのは生物として最悪である。

そう。壊れてCKを吐き出した筋肉というのは、最も壊れてはいけない心筋だった。

俺は何分間も心臓を押し続けた。

しかし治るあてはなかった。

酸素吸入が必要だが、そんな装置は存在しない。

例え買えたとしても、俺の所持金はゼロ。

それに冠動脈障害を治すことができれば、例え酸素があっても、結局酸素は心臓に届かない。

絶望的である。

『すでに死亡しています。残念ながら、救助は不可能です』

あくまで冷静なツリーが、そう一言告げた。

すべからず事実であった。

俺はぎりつと奥歯を噛んで、指の動きを止めた。

「す、すまねえ……」

俺の口から、情けない一言が漏れ出てくる。

現実で人を一人死なせてしまった気分である。

重苦しい悲壮感が背中のにのしかかってくる。

しかしだ。まだ子供は残っている。

「トシュナ。この子らを助けたいか」

俺は子供を置いて、顔を俯かせたままたずねた。

「は、はい。もちろんです」

「だったら村にある金目の物を集めてこい。それが治療代だ」

俺の沈んだ声を聞き、トシュナは大急ぎで家々を回り始めた。

こんな貧相な村に金目のものがあるとは思えないが、村中を探せば宝石もいくらかあるだろう。

しばらくしてトシュナは戻ってきた。

手のひらに米粒みたいな宝石を二、三個乗せて。

「こ、これしか、集まりませんでした……」

トシュナはめそめそ泣いていた。

必死こいて集めてきたが、しょせんは田舎村。

宝石なんかないのだろうか。

と思ったが、どうもそういうわけじゃないらしい。

俺の周囲で、ぐるっと肌の白いやつらが鋭い目でこっちを睨んでやがる。

どうも仲良くしましょうとかそういった類の視線じゃないのは確かだった。

「その男は大うそつきだ。村から金を騙し取ろうとしてるんだ！」  
毛むくじゃらというか、全身コケだらけのような男が叫んだ。

「前もそうだった。村を救うために金を出せって言って、帰ってこなかったやつがいる。きっとお前もその同類だろ！」

「まともな医者なんていないんだよ！」

次々に声上がる。

「見てみる、腕が振るえてるぞ」

誰かが指摘する。

確かに俺の腕は振るえていた。

『ドクターの身体数値が優れません。彼らはドクターの体調の変化を嗅ぎ取っています。危険だと感じたら、常にステータス画面で自己の状態を確認してください』

ツリーが俺の前をつつかと歩きながら、淡々とアドバイスをする。

スマフォのステータスを見ると、俺の健康状態が不安定になっていた。

脈拍もくるっている。

俺は拳を握り、腕の振るえを抑えようとした。  
でも震えは止まらない。

これはなにも嘘で動揺して、体が振るえているわけじゃない。  
単なる自律神経失調の持病だ。おかげで俺の腕は医者として使えない物にならないが、俺の診断まで狂っていない。

「出て行け！ お前なんかこの村にいらんわ！」

一人がぬかるんだ土を握って、俺にドロをぶつけてきた。

しかし俺は冷静だった。気を落ち着かせていた

経験不足でも俺は医者だ。なにがあるうと、どんな場所だろうと、命を救う使命だけは忘れちゃいけない。

「悪いがな、俺はこの子供の命を救えるぜ」

俺はぼそりと、そして自信を含めて呟いた。

「どうしてそう言い切れる」

「だって俺は医者だもの。医者は困ってる人を救うのが仕事なんだ」

俺はドロをはらわず、できるだけ冷静さを努めた。

腕の震えはまだ収まらない。

金を要求したのは、薬を買うためである。

保険なしで薬を大量に買うには金がかかる。

人数分用意するには、こんな米粒みたいな宝石じゃ話にならない。

「俺はトシユナの体を触ったときに確信した。骨の形。臓器の位置体の構造。そしてなにより心臓の鼓動、音、速さ。全て俺と同じだ。だから病気なら治せると思って、この話を引き受けたんだ。無理ならとつくに諦めてる」

「そ、そうなんですか……？ あれにはそんな意味が……」

混乱しきっていたトシユナが、涙を止めて俺を覗き込んだ。

「これは呪いでもなんでもねえよ。ちゃんとした病気だ。症状からしてKDだ。正式名称は小児急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群、通称カワサキ病。俺の国の医者が名付けた病気だからな、俺も良く知ってるのさ。だから治療に必要なのは呪文でも大麻の煙でも、クソまみれのベッドでもない。免疫グロブリンとアスピリン、それから清潔なベッドだ。これには金がかかる。だから協力してほしかったんだが……」

俺は嘔を吐いた。

病気が本当にカワサキ病かどうかはまだわからない。

まず拡大感染という時点で、超疑わしい。

これで確信してしまったら、真つ当な医者は笑うだろう。

症状とこの年齢層からそれっぽいと思っただけだ。

しかしこの場面で、たぶん、とか、おそらく、なんて言葉は使えない。信用させるためにも、俺はなんでも知ってる、さあ任せろって見栄と嘘を張らないと。

俺はしばらく黙った。

だが誰一人俺の言葉に耳を傾けるやつはいなかった。

「まあ信用されねえんじゃないだろうがねえな。残念だがトシユナ、お前の期待には答えられないみたいだ。お前がよければ、選んだ子供だけ救ってやつてもいいけどよ」

「あ、あの、選ぶだなんて……」

「おい娘え！ その男を信用してはならんぞ！」

いつの間にか混じっていた、雑巾みたいな口バ婆が叫ぶ。

確かに見ず知らずの男に金をあずけるなんて、賢いとはいえない。でも、この場で子供を助けられるのは俺だけなんだ。

どうするかはトシユナ、お前に任せるしかない。

俺を信用するか、それともこのババアを信用するか。

「わ、私は……」

トシユナの唇がうすく開いた。

「私は、ドクターを信じます」

「娘え！」

ばばあが大声で叫び、喉からつばを飛ばしたが、もうトシユナは俺以外見ていなかった。

「お願いです。この子を助けてください……。なんでも差し上げます。ですから助けてください……」

トシユナは表に出された一人の男の子をかかげた。

泣きじゃくるトシユナは、あまりにも必死だった。

おかしいと思って、ダメかもしれないと思っていても、なにかな望を持たいんだ。俺はそこにつけ込んで、金をだまし取ろうとか、からかってやるうなんて気持ちはない。

「お願いします……。この子を救ってください……。私の子供を、

どうか……」

「よしわかった。俺に任せろ、必ずお前の子供をだな……。私の子供だって？」

「はい。私の子供です。この宝石は母から婚約の時に受け継いだものです。ですがこの子の命が助かるのなら惜しくはありません」

「ああ。とにかく助けてやるぜ。あんたの子供をな」

俺はただ……。

「ありがとうございます……。ほんとうに、ありがとうございます。どうか、どうか、うちの子を助けてください……」

子供の命を亡くす母親の姿なんか見たくないだけだ。

自分の子供のために高価な宝石だけでなく、自分の命も差し出そうとした女性。

出会ったときにあれだけ必死だったのは、自分の子供を助けたかったからなんだ。

子を思ふ母親の気持ちに答えてやらなきゃ俺は医者じゃないよ。

この世界じゃ、俺は神なんだ。

救ってやらなきゃ、面白くないってもんだ。

「ちよつと待つてな。おいツリー、どうするんだ」

『ショップ画面の売却を選択してください』

俺はスマホを取り出し、メニュー画面のショップを選んでみた。アイテムを売る。を洗選択。

恐らく今手に入れた宝石が換金アイテムになるんだろう。

『指定の枠の中に、売却するアイテムを入れてください』

空中に四角い赤枠が現われる。一辺三〇センチほどの箱を形取った赤枠だ。

俺はそこに手を突っ込んだ。

やがて握っていた宝石の感覚が消え、代わりにステータス画面にある所持金が三百ドルほど増えた。

後はショップに必要な薬と医療器具を買ってと。

アイテムは名前検索で指定できた。ググってアマゾンで買ってい

る気分である。

実際に一つドレッシング材を買ってみる。ドレッシング材とは、バンドエイドのような傷を保護する存在だと想像してくれば間違いない。

所持金が減り、アイテム欄にドレッシング材が増える。

今度はドレッシング材をスマフォから外へはじくようにドラッグすると、手元にすんとドレッシング材が現れた。

うむ。なかなか面白いじゃないか。

「まずアスピリンだ。キシロカインもアイテム欄に欲しいな」

アスピリンは血を固まらせない作用で、血管が詰まるのを防いでくれる。

キシロカインは抗不整脈効果のある麻酔薬である。

小児の扱いというのは非常に難しいが、俺にはスマフォがあつた。投薬用の注射をすると、自動的にカルテにVライン（vein-line 静脈路のこと）とカルテに書き記してくれる。

便利なもんだなあ。

医者書類作業を省いてくれるつてのは、本当にありがたいよ。で、静脈へ薬を流し込んでやったおかげもあつて、苦しんでいた子供は一気に平常を取り戻した。（一般的に静脈注射は経口摂取（飲み薬）の十倍強く効く）

「まあ。こんな所でクエストクリアつてとこかな」

楽しい音楽も鳴らず、特別なメッセージもなかったが。

「ありがとうございます……。ありがとうございます……」

しかしだからこそ、医者として心から感謝される心地よさに浸れる。

「ありがとうございます……」

泣きながら何度も感謝するトシユナが、俺の腕を握ってきた。

嘘でも悪くはない気分だね。

『素晴らしい。ドクターはいたずらに用意された不明瞭な問題を、無事解決しました。期待以上です。初めてお会いした時、私はピン

と来ていました。あなたは常に冷静さを保ち、生物学的問題を解決する才能がある。そして、女性の胸部を執拗にもみほぐすことにも十分な才能があると。結果、そのどちらをも私の目の前でやってのけたのです』

「そーかい。そりゃよかった。で、俺は帰れるのかな」

『もちろん。さあ、眼鏡を取ってください。そうすれば、ドクターは普段の暗く湿った部屋に戻っているでしょう』

俺は言われるがままにサングラスを取った。

薄暗い砂漠の世界が、一瞬にしてさらなる暗さを得ていく。周囲の光景が見知らぬ砂漠の土地が、暗闇に消えていった。そして俺は、いつもの狭く汚い部屋の中にいた。

万年床の布団に横たわり、黒く染みた天井を眺めている。

『ドクター。あなたは大変な事をしましたね』

そんなぼーっとした意識の中で、ツリーの声がした。

「なんだ、なにをしたってんだ？」

『はあ……。深く苦しそうなため息で〕 わかりました、次は気をつけてください。あまり好ましい状態ではありませんから』

自称ヒロインが、愛想を尽かした様子で去っていく。

ドアも開けずに、玄関をすり抜けて。

俺は安アパートの我が家に戻っていた。

風の音や土の臭いもなくなり、静かでカビ臭い部屋の臭いだけがある。

面白い世界だった。だが現実の俺は、なにもない男だ。

あるのは安いアパートと、汚い寝床に、流しに放置されっぱなしの食器、それからドロのついたシャツと、袖から先が日焼けした肌……。

それから……。

「ここはドクターのお住まいなのですか？」

トシユナ。

「は？」

全力で状況を判断しようとした俺は、全力でその一言の口から漏らした。

それ以外に出る言葉無かった。  
テストはまだ終わっていない。  
これからが始まりなのだ。

## KARTE 2 - 1 自宅

俺の現実とは、より深刻な幻覚に浸食されていた。

薬の副作用で現実と幻覚の区別がつかなくなってしまったのか。

しかし俺の腕は明らかに焼けている。

強い日差しを浴びて、ひりひりしている。

引きこもりの医者がこれほど焼けるはずない。

そしてなにより……。なによりトシユナが俺の家にいるってことだ。

否定したくても、現実としていられてしまおうと否定しようがない。

「だめだ……。ちよつと死にたい……」

判断の限界量を超えた問題。臨界点を突破し、頭頂葉から湯気が吹き出る。

立ち上がってうつろつくと、体についた砂がぱらぱらと落ちた。

逃げ出してしまいたかった。

「ご気分でも悪いんですか？」

トシユナの心配そうな声に、気分が悪くなる原因はお前のせいだと言いつうになったが、言ったところで変わるわけもなし。俺は大人しく言葉を胃の奥に押し込んだ。

「き、きみは……。生きてるのか？」

「は、はあ。私ですか。生きてますけど」

「いや、そりゃそうなんだが」

あぐく、俺はわけのわからない質問をくり返した。

トシユナも嘘の存在だと思っていた。

しかしあれは本当に嘘だったのだろうか。架空世界の存在と思っていた。が、実は別の世界に俺がアクセスしていただけなのかもしれない。

もっとも、俺の頭がイカれたと結論づけたほうが説明も早いんだが。

肌の日焼けやトシユナの存在をどう処理してよいのやら。

悩みに悩んだ俺だったが、やっぱり正しい結論はなかった。  
できたことと言えば、心を落ち着かせるため、何度も水を飲んだことだけ。

まあ実際砂漠を練り歩いて、相当喉が渴いていたし。

「それは、お水ですか？」

グラスに注がれる水を見て、トシユナがたずねてきた。

「あ、ああそうだが。……飲みたいの？」

「いえ、あの、そういうわけでは」

「いいよ別に。遠慮すんな。客になにも出さないのも悪いだろ」  
と一杯くんでやる。

もちろん水はごくごくトシユナの喉を通り、綺麗に消えていった。

彼女は俺だけ見える幻覚であり、水がだばつと床にこぼれることを期待してみたが、そんな奇跡は起こらなかった。

「美味しいです。こんなお水、生まれて初めて飲みました」

「ああそう……、そりゃよかった……」

ぬるい水道水を飲んで、めちやくちゃ笑顔になるトシユナ。

笑って目を閉じると、多少は人間っぽい顔になるんだな。

でも俺はますます頭が痛くなるばかりだった。

心を落ち着かせたい。しかし薬は飲みたくない。体は薬を欲しがっているけど、理性が拒絶している。薬のせいでこんな目に遭っているのなら、薬を控えた方が良い。

なにか、もっと身体的に害のない療養法を探さねば。

「トシユナさん、ちょっといいですか」

「はい、なんでしょう」

「……おっぱい触っていいですか」

彼女はまた「はあ」と頷いてくれた。

手を伸ばして、白い肉山を掴む。

指先に伝わる張りの良い肌の感触。

俺の不安に満ちた情けない心が、徐々に安堵感を取り戻していく。黒いわだかまりが、白い巨乳に浸食されていく。

なにも考えなくていい。ただこの柔らかさに心を奪われてしまえばいい。

「これも……、なにか治療の意味が？」

「いや……、これはなにも意味はない……。俺は意味もなく巨乳を揉んでいるのだ」

「……な、なぜですか？」

「わからない。だが、逆に意味があつてはいけないと思う」

やがて心は禍々しい不安を忘れ、禍々しい安堵だけが残った。平温を取り戻した心は、実に単純な答えを導き出した。

「君はとにかく帰ったほうがいい。待つてる家族がいるだろ」  
連れて来られたはずならば、連れて行けるはずである。

俺はトシユナの手を握りながら、もう一度眼鏡をかけたが、反応なし。

俺は無様に眼鏡をかけただけである。

『あー。もしかして、もう一度行きたいのですか？』  
すると去って行ったはずのツリーが現れた。

「……まあ、一瞬だけ」

『ドクターの熱心さに尊敬の意を抱かずにはられません。医学的探求心。生物学的探求心。女性の胸部への探求心。どれをとっても賞賛されるべきでしょう』

ツリーは俺の顔に手を伸ばし、視界を遮るように手の平で目を覆った。

そしてツリーの小さな手の平がずっと下へ移動した時、そこは既に俺の自宅ではなかった。あの熱い砂漠の上であった。

突然現われた俺とトシユナを、周囲はぎよつとした表情で見つめていた。

「いいか。もう俺の家なんかに来ちゃだめだぞ」

最後に厳しく注意して、俺は再び眼鏡を取った。

誰もいないアパートに世界が変わる。

ようやく静けさと正常が戻った。

これで一段落……、と思いきや。

『トシユナさんがフォローフレンドになりました』

だがスマホは無情にもそんなメッセージを表示していた。

どういうわけだ。まさか本当にトシユナが存在しているわけじゃないだろ？

それに今のスマホは通信契約もしていないから、外に出て公共の無線LANを拾わない限りネットができないはずなのだが……。

そこで話を一週間経たせよう。

俺へのメッセージは、週に百回中百回の割合でトシユナさんに占領された。元々ネットに繋がっていた時でさえ出会い系の業者が一ヶ月に二、三度いやらしいフォローをしてくれるだけだったので、彼女だけになるのは仕方ないんだが。

いったいどうやってメッセージを送っているのかわからないが、本人にいわく、お祈りをするメッセージが届くらしい。

願って届く電子メール。

科学的原理はそこに存在するのだろうか。

いずれはその答えがわかることを期待したい。

俺も初めこそ無視を決め込んでいた。

しかしあまりに放っておくのもかわいそうな気もしてくる。

「くそ、しょうがないな」

頭をぽりつと掻いて、眼鏡をかけ直す。

いつのまにやら俺はなんの考えもなく眼鏡をかけるようになっていた。

ツリーにはよく怒られたが。

『ドクター。また物質を意図的に持ち帰りましたね』

移動するたび、自称魅力的なヒロインであるツリーの小言を聞かされる。

暑さを感じないのか、ツリーは砂漠のと真ん中でも平気な顔で説

教をした。

「うるせえな。だいたいなんだよ、なんで物を持って帰れるんだよ」  
『ドクターが所有している物は全て同時に移動されます。当然でしょう。もしそうしなければ、ドクターは毎回全裸で登場する事になります。衛生的観点からして問題です。絶対に全裸はやめてください。例え今まで全裸で暮らす生活をしていたとしてもです』

まるで俺が裸歩き大好きのような言いぐさであった。

しかし移動の管理はやはり全てツリーが仕切っているのか。

こいつ、一体何者なんだ……？

俺の妄想の産物じゃないのか……？

## KARTE 2 - 2 診療所開設

結局俺は彼らの世界に入り浸った。

彼らの集落から少し離れた位置に、緑の芝生に建てられた赤いテントがある。

俺の診療所だ。

災害救助で軍が使う緊急医療用のテントで、十畳ほどはある。中は半分に仕切られ、奥は医療器具やベッドが置かれたちよい清潔室。手前は汚い診察室だ。

患者は外で待つ。日本ではありえない待合所だが、彼らが不満を漏らすはずもない。

昔から自分の病院を持ちたいという夢はあったから、一応叶ったという喜びはある。できれば日本の土地で持ちたかったけど。贅沢は言えんしね。

お医者さんごっこと思なかれ。彼らが持ってきた食料などが、俺の胃袋に入ってくれるわけだから、十分立派な仕事といえるだろう。一体どういうテクノロジーで俺が存在しているのか、理屈もなにもさっぱりわからんのだが、とにかく満足して食事ができるというのなら受け入れよう。

「ドクター、よろしいでしょうか」

トシユナが診療所に面倒な患者を連れてくる。

肌の白い野菜人がやってきて、体のどこが悪いだと相談しにくるのだ。

みんな電球の明かりに驚くもんだから、彼らの反応は見ていて面白かった。

トシユナはナースみたいに働いてくれた。

実にいい子だった。いや、いい人妻か。

歳を聞くと一五か二十の間だという。なら若妻だな。

トシユナは性格はまじめだし、なんだって素直に従うし。自分が

らなんでもしますと言う。実際なんでもやってくれるので助かるし。彼らを診察するのは非常に興味深いものがある。

立派な医者になるには研究論文が必要だ。そして俺がやっていた研究テーマは「人類における遺伝的多様性に基づく疾患発症機構の解析、および生態への応用」であり、多少なり彼らの生態と関わっている節がある。

難しい題名だが、簡単に言つと「こういう遺伝子が病気なりやすい、なりにくいとか調べるヨ！」という話である。俗に病態ゲノム分野と言われている。

ゆえに彼らの体は俺にとってかなり魅力的だった。

現場の医者ではなく、研究者の医者でも現場復帰できるならば万々歳だ。

いつそのこと身を引き裂いて解剖実習といきたい所だが、そんな不気味なことをやって追放されたら意味がない。ここは優しい医療の神様を気取っておかねば。

「あんたら、ちんこないんだな」

特に彼らを診察していて特徴的だと思ったのが、男女共に動物的な生殖器がないことである。

人間のような有胎盤類でもなければ、親戚である有袋類でもない。どうやって繁殖しているのかは不明だが、これだけ数がいるってことはなんらかの方法で数を増やしているんだろう。

『お困りのようですね。ツリーは全ての問題を破壊するアビリティがあります』

俺が悩ましげにすると、例のごとくやたら眠たそうな声がやってくる。

こいつは人の不幸や悩みを嗅ぎ取る天才だ。

無視すれば永遠と小言をこぼすし、話しかけると偉そうな態度を取られる。

しかして確かに役立つ場面もある。

俺は今の疑問を打ち明けた。

『おお。そうですか。把握しました。ドクターは彼らの生殖活動に  
いたく興味があるようですね。確かに、ドクターのお年頃では気にな  
るかもしれません。一般的な若い男性は昼夜セックスについて考  
えるそうですね。もしドクターが、彼らの性行為をなんらかの形で  
見学、覗き、撮影等の卑猥間近の研究活動をしたいのであれば、私  
が幫助しましょう』

「いらねーよ、そんな幫助」

妊娠に伴う疾患は多い。

現代医学でも未だ死亡の危険性がある。

人間の進化において、出産だけはあまりに不完全なまま定着して  
しまったシステムだと断言できる。

なのに彼ら野菜人は妊娠に伴う危険性を一切持たない。

これは生態の画期的な進化である。

問題が大きい小さいではなく、そもそもゼロ、皆無というのは素  
晴らしい。

病態ゲノムの究極の目的は、いかに疾患に対応できるか、強くな  
れるかである。

彼らの生態を探っていけば、そのうち素晴らしい発見が見えてく  
るのかもしれない。

上手く論文にして発表すれば、一気に出世ができるかもしれない  
ぞ。

しかし、胎盤もなければどうやって子を産む？ やいどうやって  
子供を作るんだ、なんてセクラ八直球ど真ん中ストレートを患者に  
聞けるわけもないし。

いずれどこかの男と親しくなって、こっそり聞くしかないだろう。  
彼らとの友好は、食料と生活の安定を与えてくれる。

いやしかし……、生活の安定……、なんていい言葉なんだろう。

今の俺に一番足りない言葉だ。

彼らが持ってくる物資は、俺にとっちや救援物資である。

人間欲を張るといいことがない。

うん、とりあえずあせる必要はないさ。

所詮降って湧いた話だ。

元々なかったものと思って、ほそぼそと付き合っていこう。  
無論、いずれ大きなやつかい事を起こされるかもしれないが、そういうときはさっさと逃げればいいんだよ。

と、俺は消極的な前向き思考で仮の結論を作った。

正確には問題が大きすぎて、どう対処していいかわからないだけ  
なのだが。

現状維持は日本人の特技だと思う。

## KARTE 2 - 3 彼らの奇妙な生態

俺の安定した生活は、目覚めの悪い朝から始まる。

持病もあって、俺の寝起きの悪さは人類のトップクラスを誇る。

通常は枕元に用意しておいたカフェイン飲料を無理矢理飲み、二度寝をする。三十分経つとカフェインが効いてくる。カフェインに即効性はない。それと同時に、腹も動いて、腹痛で起こされる。当然ながら目覚めは最悪だ。

しかしだ、安定した生活になると、少し違う朝を迎えられる。

「ドクター、朝ですよ」

重たく開かない目蓋。俺は朝なのに暗闇の世界に沈んでいる。そこに響く、優しい声。

「起きてください。起きてください。起きてください」

と、乱暴さを伴う腕力。

俺は胸ぐらを掴まれて、一分ぐらい前後に揺さぶられた。

それでようやく吐き気と共に目を覚ます。

俺の胸ぐらを掴んでいたのはトシユナだった。

こうやって乱暴に起こせと頼んだのは俺である。

下痢の目覚めよりははるかにいい。

「ああすまない……。ありがとう……」

喉が炎症で潰れたような声を、俺は体のどこから吐き出した。

俺は床を張って、小さなコタツテーブルに近寄った。

すでに並べられている朝飯。

俺は泣くほど感動した。

軽い漬け物に、味海苔、納豆パック、味噌汁、二日前に炊いた白飯。

「素晴らしい。朝ご飯が起きたときにできてるだなんて。ありがたい。こんな素晴らしいことはない。助かるよトシユナ。ああ味噌汁がうまい。素晴らしい。素晴らしい」

「言われた通り粉をお湯で溶かしただけです……」

「いいんだよインスタントかどうかなんて。用意してくれるだけで本当に助かるんだ」

俺は涙を流して健康的な朝飯を食べた。

トシユナがなんでもお手伝いしますとせがむもんだから、とりあえず朝食を頼んでみた。

俺は一人暮らしが長いものの、炊事家事の技術が小学生以下である。

「いいか、朝食は食わないとだめだ。食わないと血糖値が上がります。いい体質になる。血糖値が高いと、やがて糖尿病や動脈血栓を起こす。脳卒中になれば、半身麻痺で生涯寝たきりだ。覚えとけよ。……ああ、うまい。うまい」

朝食はこれとこれをこのように並べなさいと指導もした。

絵にも書いて説明した。

というかまず夜の内にうつわだけは並べておいた。

はつきり言って全部やらせである。

他人を一晚スタンバイさせるほど念入りに組んだやらせである。

やらせで、俺は泣くほど感動していたのだ。

しかし任せてみて間違いはなかった。

さすがは主婦だ。俺の不純不規則不摂生な朝飯を正しいものに変えてくれる。

ガスコンロの存在を教えると、わーきゃー言いながら大喜びしてくれた。

俺は手が震えている間ははまともに料理が作れないどころか、食うこともできない。

食事の手伝いをしてくれるのは願ってもないことだ。

「ドクター、もしかするとその豆は腐っているのでは？」

「え？ ああ、これが、納豆ね」

「もしかしてお出しするのを間違えてしまったのでしょうか。酷い臭いです」

「いや、これはそういう食べ物なんだ」

「なにも無理にお食べにならなくても」

「無理に食べてるわけじゃない。結構美味しいし、体に良いし」

「なるほど。お薬なんですね」

「そういうわけじゃないが。トシユナも食べてみるか？」

俺はねっばねっばな糸を引く納豆を差し出した。

トシユナはくんと鼻を動かし、恐る恐る、そして最後は大胆に納豆を口に掻き込んだ。直後、うえっと彼女の喉奥が拒絶反応を起こしたものの、トシユナは咄嗟に手で口を押さえ込んだ。

「お、おいしいです、あ、あ、あ、ありがとうございます」

ものすごいひん曲がった眉で、世界一ヘタクソな嘘を吐かれてしまった。

トシユナの口には悪臭が残り、俺の心には罪悪感が残った。

すまない。外人さんにいきなり納豆はないよな。

でも俺の生活費では貴重な栄養源なんだ。でなけりや木をほじくって樹液でもするしかない生活を送ってるんだ。

食事が終われば、トシユナは手際よく全てを片付け、服まで用意してくれた。

大助かりだ。

それでいて彼女は診察の手伝いでもなんでもやる。

役立つかどうかは別として。

トシユナは友達連れてきたりもした。

もうなんだか簡易診療所というより簡易お茶会場である。

「こちらはマルーロです。マルは私の親友です」

紹介していただいたご友人・マルは印象の違う女性だった。

目つきが鋭く、表情が硬い。

トシユナの目が丸くて、表情ゆたかだから極端にそう見えるだけかもしれないが。

ともかく、マルの第一印象は冷たい顔だった。

瞳なんかトシユナの半分ぐらいしかない。目尻もつり上がって、

普通にしているだけでも睨んでいるみたいだ。それでも俺に比べちゃ倍以上の大きさを持つてる瞳だが。

俺ははあと頭を下げ、まず水を出してやった。

別に俺がケチなわけでもなく、彼らは日本の水道水でとことん喜ぶから、単純に水を出しているだけである。

「トシユナが働いてるのってこんな変な所なんだ。もつと凄い場所だと思ってたな。涼しくていいけどね。でもなんでこんなに明るい。へえ、電気？ なにそれ？」

マルは淡々と、声には感情を乗せつつ、表情には感情を出さずという器用な喋り方で、出会い頭に失礼なことを述べてくれた。いつの間にトシユナが正式雇用になっていた事実を雇用者の俺に伝えながら。

「よろしくドクター！ トシユナは結構まじめでいいやつだ、優しくしてやってよ」

俺はああとだけ生返事をした。

まだマルが言ったこの言葉の意味を、深くは理解していなかった。マルもまた、俺にとっては興味深い生命体だった。

ぜひ解剖……、いやいや、調査して、体の構造を調べたい。

顔や体つき、髪型なんぞはいろいろ個性があるし、頭から生えている葉の形状も個々によっては独特だったりする。

そして男は男。女は女で特徴がある。

特に特徴的なのは、その胸だ。

どうもこの女性らはやたらめったに胸がでかいのである。

ふざけて言っているわけではない。統計的にマジな話だ。

しかもそれをしっかり隠すだなんてとはせず、じゃらじゃらの金属ビキニで隠すだけ。頑張っても包帯みたいなサラシを軽く巻いただけ。これで隠したつもりでいる。谷間に辞書が二冊は入ると思うサイズは、そんなものじゃ隠れやしない。

例えば彼女らが人間的な見た目をしておらずとも、ボディラインは絶品である。

男としては言葉に詰まるだろう。

しかも村の連中は古いも若きも、全員胸が大きい。

巨乳しか生き残れない世界なのかと思うぐらいである。

「はいドクター。今度はドクターに」

マルが陶器のコップを返してくる。

しかし飲んだというわりには水量が増えているような。

俺はコップを手にしてふと迷った。

なんだかぬるい。鼻を近づけてみると水じゃない臭いがする。

レモンと蜂蜜を溶かしたような臭いだった。

これはマルが持ってきてくれた地酒か地ジュースか？

でも来たときは手ぶらだったような。飲んで平気だろうか。

トシユナやマルに平気で、俺の腹には全然ダメってこともあるしな。

しかし出されたものを目の前で捨てるのは、日本人としてためらう所がある。

俺は少し口に含んでみた。

わりと美味い。ちよつとした酸味に、やっぱり蜜のような甘味がある。ただしアルコールはない。果実でも搾ってきたのだろうか。

「わりといけるな。なんだいこりや」

「マルの乳水です」

トシユナのさらりと出た一言に、俺の動きが止まった。

なんだって、原産地がマルだって？

「あー。製造過程を知らないんだが、どうやって作られたんだこの水は」

「こう。胸をしぼってです」

なんてこった！ 母乳かよ！ そりゃ手ぶらでも作れるわ！

しかも白っぽいわけでもなく、ほんのり黄色な上、この量はないだろうよ。乳牛並だぞ。たしかに乳牛並の胸してるけど、みなさん「マルは子供がいるのか？」

マルが首を横に振る。

妊娠もありえない。

なのに母乳が出るってのか。

「マル、頼みがある」

「なんだいドクター」

「おっぱい触らせてください」

マルもまた一旦眉を潜めた後、「はあ」と呟いた。

両手を伸ばし、ぐつと片方の肉玉を掴んでみる。

男の両手でも収まりきらない巨大さ。

色と良い張りの良い、まさにバレーボールである。

「ちよつと腕を上げて、脇の下を見せてくれるか」

マルは言われたとおり、両腕を上げた。

両手で右乳房を挟んでみると、C領域（乳首（E領域）の上外側）に小さなえくぼが生まれた。えくぼとは、へこむシワである。つまりなにかあるということである。

こんな所になにかあるといえば、しこりでしかない。

表面を押してみると、確かなになにかがあつて、ぐにゅぐにゅと動いた。

「痛いかな？」

「ベツにそんなことないけど」

「C領域にDimplingの陽性。大きさはセンチ以下。圧痛なし。可動性の良好か。鎖骨上のリンパ節への転移とかはないな……。マル、君はしばらく俺の所に来なさい」

「……なにかあるのかい？」

「あるかどうか判断するために来るんだ」

「ドクターに胸を揉まれるために？」

「そうだ。来るたびに揉む」

「マル、ドクターの診断は確実です。特に胸を揉まれた時は、なにが正しい行いの前ぶれなんですよ？」

怪訝そうな顔をするマルに、トシユナが説得を始めた。

「それは……、なんとなく理解してるけど……。……んっ」

乳房の先端をぐつと摘んでみる。

重たい全域を下から支えながら、乳首の周囲をしぼるように。  
しこり発見時に確認する基本要素は三つ。

可動性か。（くつついて動かないのは、筋肉に張り付いている悪性）

dimpling（えくぼ症状）が見られるか。

それからしぼった際、分泌液が出てくるか。

と基本的な検査をしたんだが……。

そういえばこいつら、なにもなくても出てくるんだっけ。

「や……、ド、ドクター。それは……。んんっ……、だ、だめ……  
っ！」

やりすぎたのかなんなのか。

さつき俺が飲んだ液体が、じろじろと流れてきた。  
母乳という量ではない。

これは色と良い、量と良い、なんというか……。

「……君たちや、一体どういう体の構造なんだ？」

『疑問を持ちましたね、ドクター』

首をかしげた途端、突然やつが現われた。

ツリーがひょいっと俺の司会に入ってくる。

現われたり消えたりが激しい、まるで背後例みたいなやつだ。

『私は愛するドクターがこの世界に深くずるずると隙間なく馴染めるようサポートするのが役目です。なにに興味をお持ちですか？

ああ、なるほど。女性体の乳房に興味を持ちましたか。大変結構。

なるほど、さすがはドクター。興味津々ですね、乳房に。私はあなたのモチベーションの高さを称えているのです。女性体の乳房に興味を持ったドクターは、まさに研究者としての鏡でしょう』

殴りたいのかこいつは。

「で、お前は俺の興味をどう解決する」

『メデイカロペディアという辞典があります。この世の生命体全てを網羅した素晴らしい辞典であり、例えばどのようなマヌケで落第点を

なゴクツブシの人間でも操作ができるという高度なインターフェイスを持ち合わせています』

自慢げな口調が実に腹立たしい。

しかして役立つ情報なのがさらに腹立たしい。

俺はあぐらを掻いた上にスマホを置いた。

実を言うと、辞典の存在は知っていた。

しかし使い方がいまいちわからないのと、全てが英文である。

長文の英訳を嫌って放置していたが、辞典には彼らの生体についても詳しく記載されている。読むなら今しかない。

『カメラを調べたい対象に向けてください。オーノー。乳房ではありません。全体を移してください。興味が向けられているポイントが胸であるのは理解しますが』

俺はスマホのカメラを向け、彼女らに関する辞典を検索した。

幸いにも検索は成功し、不幸にも彼女らに関する項目は百近くあった。

しょうがないのでおっぱいだけを検索することにしよう。

……俺はネットを覚えたばかりの中学生か。

『女性種は乳房に貯水が可能。腎臓から発生する尿は水分と固形にわかれ、保存すべき水分は胸へ。アンモニアは大腸で固化し、排便される』

が、俺が軽く訳した内容である。

残りの数十ページ近い生体に関する英文は、とても訳す気にはなれなかった。

うーん。

ということはあるか、今俺が飲んだのは甘いおしっこか。

尿なら糖分をほんのり感じるのも頷けるが。

しかしならば男はどうなるんだろう。

『男性種は排便時に植物の種を巻くことができる。尿と便同時に排出することで、種の肥料の役割を持つ。彼らの多く住む地域では、高い緑化効果が検証できている』

おお。男は常にギリピーになる代わりに、周囲の環境を緑に変えていく力があるのか。だから周囲は砂漠なのに、集落は緑に囲まれているんだな。

便をただ流して捨てるだけの人間とは偉い違いだ。

地球に優しいウンコ。努力せずとも緑が栄える。

素晴らしくエコなウンコだ。

俺は腕を組んで呻り、想像を膨らませた。

外は砂漠地帯。雨はいつ降るかわかりやしない。

水は貴重だ。尿分だって排出したくない。

だから女性は貯水できる機関が発達する。やがて貯水機関である胸が大きければ大きい種ほど、生き残る可能性が高くなっていった。まるでラクダのこぶのように。

つまり本当に巨乳こそが生き延びてこられる世界だったんだな。

男は男で、周囲を緑化し、自分達にとってよい環境を作り上げていくことができる。

うーん。すげえ。

一見バカバカしいようで、非のない生命活動だというのがすげえ。ここは砂漠地帯だ。

人間だっていざとなりや自分の尿を飲む。おかしい話じゃない。客に尿を振る舞うのはおかしい話だが。美味いからいいけど。

「はあ……。ア、アタシ……。来るたびにこんなことされるのかい……？」

マルがちよつと恥ずかしそうに顔を赤らめる。

顔にもちゃんと血管があるんだな。

「しこりの変化、成長を見ただけなんだが」

「しばらく出さなんて、初めてだよ」

「……じゃあ普段はどうやって出すんだ？」

「なにもやしない。ちよつと脇の下に力を入れれば出るよ。男にはわかんないだろうけどね」

それってまるっきり尿の出し方じゃないか。

排泄器官の一部機能が胸のほうへ行っただと思ってまず間違いないな。

「もしかして痛かったのか？」

「ううん。全然痛くない。ただ、なんていうか……、その、へ、へんな感じで……」

「ドクター、新患ですよ」

地面を睨みつけて考えを巡らしていた俺の頭に、トシユナの声が割り込んできた。

そこで俺はくだらない推理を一旦やめた。

この尿もどきは、とりあえず後で成分検査してみよう。

しかしなにで検査すればいい。尿検査マシンか？

ただ、尿検査マシンというものは例外なく調子悪い。医療関係者内では常識の事実だ。異物でトドメを刺さなきゃいいが。

## KARTE 2 - 4 歪み始める現実

俺は調子のいい時間を狙って、診察に当たる日々を過ごした。三十時間連続勤務の病院では、客はレジ打ちをするかのごとく流さなくてはいけない。自由に休憩が取れるスタイルは、俺にとってありがたかった。

「腹が痛い？ あんたみたいな患者、多いみたいだね」

この日、若い男が患者としてやってきた。

もちろん彼も肌が真っ白だ。

筋肉質で、いかにも健康的である。

そんな男がぎゅるぎゅる鳴る腹に悩まされていた。

歳のせいではないだろうし、重大な疾患で免疫力が落ちただけならば、被害者は彼一人のはず。しかしこの地方には、こんな患者が結構多かった。

となれば、外部的要因、つまり食物が水質汚染が原因とである可能性が高い。

クリプトスポリジウム症みたいなものだろうか。（世界的に有名な水系感染症）

俺は環境技術屋でないにしろ、ある程度の環境的知識はある。まずはどんな物を口に出しているのか調べれば、ある程度の原因がわかるだろう。

この世界にあまり衛生の概念はないはずだ。

なら基礎的な改善をするだけで、ずいぶんと良くなると思う。

なんてたかを括っていたら、本物は想像以上に酷かった。

後日、俺は彼らの生活環境を細かく調べ上げた。

集落の中心にあるオアシス。

左右に広がる熱帯雨林と茶色い竹。

綺麗な砂の中に存在する、どこかの球場クラスほど広いコーヒーマットの沼、もとい湖。ジャングル探検隊のテレビ番組でこんな川をワニ

やら猿が泳いでいるのを見たことがある。

彼らはこれを生活用水、つまり飲み水にしていた。

洗濯もするし、入浴もするし、口もゆすぐ。

最悪なのは畜産農夫である。

家畜はやぎみたいな形をした、こぶつきの小動物だった。

毛は皮膚病を冒した犬みたいにボサボサで少々見苦しい。

その家畜の手段が、水をがぼがぼ飲み、ぶりぶりその場に糞をまき散らしていた。つまり家畜がついでに糞尿もするような水を、この住民は腹に入れていたのである。

こんな光景、聖なるガンジス川ぐらいでしか見られない。

そりゃ腹も痛くなるわ。

しかも日本こそ山と海が近いから水がすぐに流れてくれるものの、ここは参ったことに水が滞留する。ようするに汚れが外に流れ出にくい土地になっているのである。

自然による自己浄化機能が薄ければ、衛生は悪くなるいっぽうだ。「ドクター。どうなされたんですか」

すると聞き慣れた声が俺を呼んだ。

俺は声の方向に目を向けたと同時に、目を背けた。

「ああトシユナ、な、なにしてんだ……？」

トシユナは川に浸かっていた。

しかも、わりと団体で。

若い野菜人の女子会である。

「入浴です。いつもこうしないと、体が乾いてしまつて。暑いですし」

体が乾くつてどんな生物だ。

水分が過剰に必要なのは、やはり植物もときだからだろうか。カッパみたいだ。

確かに周囲を見ると、そこら中で誰かが水に体を沈めている。

暑さ対策にはこれが一番なんだろう。熱射病予防にもいいかもしれない。

「わ、わるい、邪魔したな……」

俺は背を向けたまま謝った。

顔は人間じゃない。動物の裸を見たってなんとも思わないさ。だかね、やっぱり肌こそ白いものの、体は完璧に人間なんだ。ウエストはすつとしまつて、お尻は少し下付にたるみを持っている。

ぼんつと出た胸は、後ろから見ても姿を確認できるほど大きい。よく形がいいとか、適度な美と表現する場合もあるが、この大きさはもはや下品。しかして圧巻。

しばられた筋肉から放たれるスマートかつ芸術的な鋭いパンチではなく、参議院衆議院の議決を数の有利さだけで押し通すような、下品でありつつ揺るぎない体当たりである。

それをなんの躊躇もなく水に浮かべているんだから困る。

おまけに、それが数体おられる。もちろんここの住民は裸なんてなんとも思わないらしいからいいんだろうけど。

「は……、はら、腹が痛いって患者が多くてね。調査しててね」

俺は目を細めながら、本来の目的を語った。

女の裸なら何度か見た。ただし死んだ形で。

生身の相手だと、俺は情けなかった。おかげで声は変に上擦っていた。

鎖国的な島国日本人ほど、文化の違いに弱い国はない。

「ドクター仕事ねっしーん。熱くないの？」

軽い声と共に、俺の体が引つ張られる。

名前も知らない女性が、俺の服を引つ張っていた。

くるんと外ハネした葉髪をした女性である。

「いや俺は……」

「暑いうちは、水につかってさっぱりしたほうがいいよ」

「砂で汚れた体も綺麗になるし」

「いいのよ、ほっとけば。男なんて、五日に一度、お風呂に入ってくればいいほうなんだから。うちの旦那なんか、もう二週間もそ

のまんまで。言っても聞かないんだから」

「うちもうちも。男ってどうして風呂嫌いなのかしらね」

互いが旦那の愚痴を言い合う。

こういう会話はどこの世界に行っても好まれる会話なんだな。

ちなみに俺はどうかというと、旦那達に賛成である。

風呂嫌いというのは賛成しかねるが、この湖に浸かって、体が綺麗になるとは思えない。むしろ体に傷でもあつたら、なにかの感染症を起こしかねない汚さだ。

だから暑さしのぎに入れと言われても入りたくない。

「ドクターも入ってみなよ」

しかし理想的な体型をした若い女性達が、一緒にお風呂に入りましょなんて言ってきたらどうする。当然やつらは人じゃない。別の生物だ。理性を失ってはいけない。

これは畏だ。落ちた所で衛生的にも人間的にもなんの特もない。

「ツリーよ、聞いてるか」

『はい。全て聞いてます』

姿はしないが、ヒロインの声だけが返ってきた。

「彼らの調査のため、俺はこの湖を調べる必要がある」

『しかし不衛生極まりない水であるというのは明らかですよ』

「これは畏だ。だが畏とわかっていても、ひっかかってしまいたい畏もある」

俺はズボンと上着を脱いで、パンツとシャツ一つで湖に入った。

俺の理性は弱かった。

「う、ぬ、ぬるい！ 不自然にぬるい！」

水質は想像以上に酷かった。

あまりにもぬるくて不快な水温。

足の裏に、にゅぐうつと伝わってくる不快なヘドロの感触。

浮かんだドロが、肌にとわりついてくる不快なねばりけ。

近づいて見ると、白い糸ミミズのような不快な生物が、ぴんぴんと水面を泳いでいる。

何一つとってもいいものがない、この総合的不快感！

医者として、いや人間として何一つ受け入れられない！

「いやああ……。だ、だれか……。おとこのひと呼んでえ……」

湖という沼に浸かった俺の喉から自然と出てきた台詞である。

やはり畏だった。おっぱいにひかかった男の末路である。

自分が潔癖症だとは思わないが、この酷さは誰しもが絶句するだろう。

ただ、本当にやっかいな問題は、もっと他の場所あったのである。俺の気づかない場所に。

ひっそりと。

不快な入浴から逃げだした俺は、一旦自宅に戻ってシャワーを浴びた。

排水溝には茶色い水が滴り、毛の間からみついたぬめりはいつまでも取れなかった。

変に体を強ばらせたおかげか、気がつくとな腕がガタガタと振るえていた。

腕が自分のものではない感覚だ。

昔わずらったしよっぱい病気が未だに尾を引いている。

まるで腕が一本どこかに飛んでいつてしまったかのようなのである。

見てみればわかる。

実際に俺の右腕はふるえ、左腕は消えていた。

肘から先が、すーっと消えて……。

「え……？」

シャワーを浴びながら、俺は息を止めた。

血走った目玉をぐりつと飛び出させる。

大事な物を忘れた時に流れる冷や汗が場どばつと出た。試験日に学生書を忘れたとか、メシを食ってサイフを忘れたとか、運転中、警察に呼び止められた時に免許書を忘れた事を気づいたような気まですである。

しかし俺の左腕は、なんと見ても存在していなかった。

肘から先が消えている。

んなばかな。

指先を動かす感覚はあるものの、そもそも腕が存在していない。幻覚にしては妙にリアルで、妙に違和感がない。

鮮明な夢のようだった。

いよいよ脳みそが崩れ始めたのか。

しかし蛇口から流れ落ちる水道に左手をかざしてみたものの、水の流れはなににも阻害されず、いつまでも真っ直ぐ落ちていた。

本来は左手が邪魔をし、水滴をびちゃびちゃとはね飛ばすはずである。

静寂かつ狭すぎるバスルームで、俺は動けずにいた。

今までの人生経験を総動員しても、この異常事態に対処できない。投与していた薬の量が多すぎて、俺の脳に深いダメージを残していたのか？

いや、幻覚ならいい。

もし本当に腕が無くなっていたとしたら……。

「いつでえ！」

俺は左手が存在している感覚で、拳を握り、風呂桶のふちを叩いた。

すると小指の基節骨に鋭い痛みが走った。

思わず左手を抱きかかえると、そこには確かにいつも通りの左手があった。

なんだ。痛みで正気に戻ったのか？

古いテレビか俺は。

なんにせよ、戻ったのなら別にかまわないが。

やっぱりたちの悪い幻覚だったか。

最近変に体を動かしたもんだから、睡眠が正しくとれずにいる。

不眠症と薬のコンボは、簡単に現実を歪めてくる。見えないものが見えて、聞こえないものが聞こえてくるのだ。

今後もし起きるようなら、それこそ薬を一旦やめないと。

## KARTE 2 - 5 槍害

ようやく体を洗い終え、衣服を整えた俺は、湖に戻った。

水辺のそばに座り込んで、トシユナと顔を会わせながら話をする。他の面々は胸にくつつけた白いメロンを浮かばせながら、暢気に半身浴を続けていた。

「少なくともこの水に触れてる間、みんなの腹は治らないね」

「ですがこの水がないと」

「最低限飲む水は綺麗じゃなくちゃいけない。家畜の糞尿が混ざるなんて最悪だ。できれば飲み水だけでもろ過を義務づけるかしないと。別に水が湧いてる場所はないのか。なるべく透明な水だ。どこかにないか？」

「他の湧き水の場所でしたら私が案内します」

よし。なら行こう。

先に立ち上がった俺は、親切のつもりで手を差し伸べた。

するとトシユナはその手に軽く驚いて、明らかに身を一步引いた。

キモい男から手を出されて困ったというように。

いいさ。しよせんは馴れないことをしたまでだ。

ぎこちなくて、どこかキモかったんだろう。

変に振るえてるし。

トシユナの気持ちはわかる。

「あ、すいません。いえ、自分であがれますので」

トシユナは足を上げ、湖から自力で身を持ち上げさせた。

すまん、どうせ俺はキモいんだ。自覚はしてるよ。

もやもやした気持ちを抑えながら、俺はトシユナを連れて砂丘に登った。

俺はトシユナに衛生の概念と、煮沸を含めた、ろ過の有効性を説いてやった。

水因の腹痛なんてものは、基本的な約束を守っていれば、まず治

るものである。

「びょうげんきん……？　というのはなんでしょう？」

「そうだな。えっと。目に見えない虫だと思え。目に見えないほど小さい虫だ」

「虫ですか」

「そうだ、虫だ。この足下にある砂粒なんかより、もっと小さい虫だ。病原菌はいたるところにいる。特に汚い物の中にいる」

「汚いものとはどんなのですか？」

「汚いつてのは……、いろんなわけわかんないもんが混ざったものだ」

話が進まない。俺は四苦八苦しながら説明を続けた。

やはり文化の違いという壁に日本人は弱い。

日本人相手ならば、知識も食事も宗教も価値観も全て一緒に、黙ってたって十分なコミュニケーションが取れる。しかし土地が違えば、食べる物が違う。宗教が違う。学力知識が違う。俺は異文化と上手く付き合う訓練をしてこなかった。

だから俺もトシユナの説得には相当苦労させられた。

向こうは興味津々に話しかけてくるから、黙って流すわけにもいかない。

そんな微妙な距離感を保ちながら砂丘を歩くと、どうにかこうにか質の良さそうな水を探し当てた。試しに少量だけ口に含んでみたが、味に違和感はない。

しかしその湧き水は五平方メートル程度の水たまりである。集落からも遠く、この距離を水がめ持って歩くのはかなりしんどいだらう。

しかし飲むとすれば明らかにこちらの水である。

「はあ。いやしかし暑いな。少し休憩しよう」

俺は湧き水で顔を洗って、その場に腰を落とした。

この場で眼鏡を取ってもいいが、結局この地点から再開するのも面倒である。

それに。

「腕が振るえてますが」

「ん？ ああこれ。気にするなよ。大した病気じゃない」  
俺の体調もあった。

「ドクターでも治せないのですか？」

「治せたらいいんだけどね。抑えても止まんないんだ」

トシユナに振るえた手を差し出してみる。

すると、トシユナはまた一瞬身を引いてしまった。

「いや、すまない。別に驚かせるつもりは」

急いで手を引っ込める。

きつと手を差し出すことになんらかの抵抗を持つ文化があるんだろ。

俺はそれほど暑くない炎天下の元、気まずさに包まれた。

もしかして俺は嫌われているのか？

「も、もうしわけありません。あの、平気ですから」

とはいうものの、いかにも歯になにかつかかった口調である。

俺はなんとかコミュニケーションを図った。

今後のためにも、彼らの価値観を理解せねばなるまい。

「トシユナは……、えっと。仕事とかなにかしてんの」

「畑仕事です」

「なにを育ててる」

「アナプトという野菜です。表面が緑色で、中はみずみずしく甘い果実のようなものです。大きさはそうですね、人の頭ぐらいありますよ」

俺の頭に浮かんだのはスイカかメロンだった。

エジプトなんかはスイカの世界的名産地だし、気候的には相性いいのかな。

「農家はいいよな。ああ。農家をやろうかな、俺も。人に縛られないし」

「どうしてそのようなことを。ドクターには、医術があるじゃない

ですか。野菜作りだなんてダメですよ。素晴らしい力を無駄にしてはいけません」

トシユナのやたらでかい瞳が、力強く俺を見つめる。

「野菜作りだって大切だろ。やりがいだってあるんじゃないのか」

「……ヤリガイってなんですか？」

キョトンとした返事をなげられ、俺もキョトンとした。

「ほら、楽しいとか。充実とか。将来はこうなりたいっていう夢っていうか」

「私は……、ヤリガイって考えたことがないです……」

「そ、そうか」

「もしヤリガイというものを持ったら、私もドクターみたいになれるでしょうか」

「俺みたいになっちゃ困る。夢や希望は持った方が良い。希望のない人生はだめだ。毎日が暗くて、明日なにをしないかわからない人にとって一番の苦痛だ」

例えば今の俺みたいな人生さ。

と、本来は言葉の尻にくつつけるべきだったが、俺の口はそのまま動かなかった。

トシユナが俯いてしばし考えているような表情を作った。

経験者の言葉は、トシユナの胸に深く響いたらしい。

「ヤリガイ。私も……、探してみます」

「ああ、見つけられるといいな」

「ドクターはどうやってヤリガイをみつけたんですか」

「な、なに。俺がか？ うん。人を助けるのがヤリガイなのかな」

「人を助けるのは楽しいんでしょうか。どうしてそう思ったんですか」

俺はあごをさすりながら、脳みその奥をほじくった。

医者をする理由。

「俺には……、まあ大事な家族がいたんだよ、昔名」

きっかけは小学六年生の時だった。

俺は犬を飼っていた。大型のハスキー犬。何年も一緒にいた家族だ。

彼は三尖弁閉鎖不全による心肺機能の低下と酸欠で、常に息苦しい思いをしていた。肺水腫の咳は通常の咳とは違い、非常に痛々しい。

でも俺は苦しんでいる家族を見ながら、なんにもできなかった。ぜえぜえしている姿。なんとかしてやりたい。でもなんにもできなかった。

辛いんだよなあ、ほんと。泣けてくるんだ。出会った時からの思い出が全部浮かび上がってきたりして、息が詰まる。詰まるけど、その解消方法は一切無い。

なぜ家に来たのかとか、家に来て幸せだったのかとかいろいろ考える。胸を撫でるだけの自分に、もう少しなにかできないかとも思ってしまう。

あつさり死ぬなら覚悟はいらない。

死ぬ運命であつたり、死ぬ間際の家族のケアは、本人にしかわからないほど辛い。

やがて彼は弱りに弱って死んでいった。

「救ってやりたいって思うのは、俺が辛いからだ。目の前で最愛の者が死を前にして苦しんでる。いつそ殺してやるほうが親切に思えてくる。胸がしめつけられ、容赦なく気持ち悪い。それが永遠と続く。わかるだろ、辛さが」

「はい」

トシユナも経験者だったな。

「じいちゃんが死んだ時もそうだ。あれは寿命だから仕方ないんだが。でも縦隔腫瘍でおやじが死んだ時、俺は決意したんだ。もうこんな思いをしたくないってね。俺が医者を続ける理由は単純。苦しんで困ってる人を助けたいから。それに尽きる。正義の味方は悪を倒せても、病气やがんを倒すことはできないからな。だから医者なんだ。……青臭いと思うか？」

「いえ、素晴らしいです」

「ばかな話しちまった」

俺は首筋に垂れる汗を腕で拭った。

持ち帰った水は、まず腹を抱えた男に見せてやった。

こういった水を飲んでいれば、すぐに腹も治るだろうと。

さすがに我が家の水道一本で住民全員の生活用水をまかなうわけにはいかんし。

これで一つの面倒は去った。

だがやっぱり来た。どでかい面倒が。

## KARTE 3 - 1 噂

面倒がなければいいと思った通り、面倒はさっそくあちらからやってきた。

ある日、診療所に一人の男が訪れた。

「我々の家族は今恐ろしい呪いに命を落としています。お告げでは、あなたが全てを救う神であると。お願いします。知識の神よ。全能の神よ。我々に慈悲をお与えください」

そいつはガスマスクでも被りながら喋ったような曇った声だった。またなんとも奇妙な姿をしているやつだった。

猿の二足歩行のような肩の丸まった歩き方をしていて、皮膚が土気色をしている。

なにより特徴的なのは、握り拳台の赤い目玉が前方に一つ、左右に一つずつの計三つあるという点である。トシュナは比較的人間らしかったが、こいつはパーフェクトにエイリアンである。

そのエイリアンはダーコと名乗り、俺を目に入れると同時に跪き、祈るように今のこと述べてきた。

まあどうせ呪いと言っても病気の類だろう。

しかしトシュナも出会った時はお告げがどうとも言っていた。

俺を宣伝してまわるやつといえば……。

「すまないが、上司と相談するから席を外してくれ」

ツリーしかない。

「……上司ですか？ 神であるあなたに？」

「ドクターにしか見えない精霊がいて、たまに独り言をぶつぶつ言っっては、誰かと相談する不気味な仕草をします。始めはアレ？って思っんですが、じきに慣れると思いますよ」

笑顔でトシュナに酷いことを言われてしまった。

とりあえず促されるまま、ダーコが出て行く。

「ツリー。いるか。おい出てこい」

『事情は把握しています。ドクターはダーコという生物の胸にご興味があるのでしょうか』

「お前がなにも把握してないのは把握できたわ」  
背後霊のように現れるヒロインに説明をする。

悔しいが迷った時の相談相手としては最も信頼がおける。

他に誰かいないのも事実だが。

俺は事情を話した。

「で、そのエイリアンたちに話を吹き込んだのはまたお前なのか？」

『いいえ。恐らく彼らは、ここの住民達の噂を耳にしたでしょう。彼らの村と、ここの住民達の一部は貿易上の交流があります。ごく自然な文化伝搬の形と推測されます』

「なるほど。……それでツリーとしてはどうなんだ。テストとして行くべきなのか？」

『彼らの生態系の調査、記録、診察、解剖、遺棄廃棄、隠蔽などは重要な行動であると評価できます』

ようは行くべきということか。

腹は立つが、従って損をした覚えがないツリーの助言。

俺は外で待つダーコを呼び戻した。

そしていの一番に、向こうから一言。

「報酬は用意しています。まずは手付けで」

ダーコの手が後ろに伸びる。

現れたのはどかいダイヤの指輪だった。

俺の親指の横幅よりも大きなダイヤである。ぴかぴかきらきら光って素晴らしい。

年のためにスマホで査定してみたところ、三万ドルで売れることがわかった。

去年の俺の年収の三倍はある。しかもこれが手付けだっておっしゃられる。上手く行けばさらにドドンと年収一千万の舞台だ。

俺は腕を組んで、眉を寄せた。

「う、うむ。病人がいるとなれば出番だな。医者は困ってる人を助

けるのが仕事だ」

俺の心は弱かった。

金のためなら、犬にだって従おう。

「では私は村で待っています。ご都合が良くなりましたらお越しく  
ださい」

「……連れていかなくてもいいのか？　これ、持ち逃げするかもしれ  
ないぞ？」

「神よ。私の目は三つある。二つは物を見るため。残りの一つは心  
を見るため。そして私がたった一つの目で見た限り、あなたは信じ  
るに値する神だと判断した」

「……なんだそれ」

「例え持ち逃げされても、あなたはその金で別の方を救ってくれる  
でしょう。眺めるだけの石ころが、誰かの命に役立つというのであ  
ればそれでもよいのです」

ダーコがひよっこひよっこことテントから出て行く。

不思議な奴だった。

俺よりも道德観に溢れ、俺よりも落ち着いた理性を持っている。

信頼してもよさそうなやつだ。

「行かれるのですか、ドクター」

ダーコの後ろ姿を見送ったトシュナが尋ねてくる。

「行ってやりたいけど」

「こちらは気にしないでください」

彼女は笑っていた。

「ドクターは人を救う素晴らしい力があります。その力はもっとた  
くさんの人に施されるべきだと思います。ですから構わず行ってく  
ださい」

彼女もまた、道德の高い人だった。

誰も俺を止めやしなかった。

「しかし行けと言われてもな……」

俺は少し悩んだ。知らない土地と知らない世界に、一人でぼっ

というと言つのも気が引ける。自称メインヒロインさまは現われたり現われなかったりと、あまり俺の都合を考えてくれないし。

ダーコなら俺に世話役でもつけてくれそうなおもするが。

「俺一人では辛い。一緒に来ないか」

俺は静かにたずねた。

トシユナは雑用として仕事を買ってくれるが、ナースとして役立つほどでもない。いなくても医療行為に支障ない。しかしないと日常生活に支障が出る。

内心びくびくで助けてくださいに来てくださいと泣きつきたかったが、それじゃ情けないので、表情だけは極めて冷静に努めていた。

俺は医者である。嘘を吐くのをためらうはずがない。

「私ですか、私がお役に立てるんでしょうか」

「家には子供もいるんだろ、無理にとはいわない」

「え、私が決めていいんですか。私なんかが」

「ただ正直いえば来て欲しい」

「えっと……、その……」

「トシユナが必要なんだ」

口から出任せもいいところで、怖いので一人にしないでという言葉葉を、よくもまあこれほど威厳を持って言い換えられるもんだと我ながら感心してしまった。

さすがは医者だ。嘘は医者の特技だな。

トシユナはしばらくあれこれ悩んだ素振りを見せたあと、診療所に戻って、荷物をまとめてでてきた。どうやら来てくれるらしい。

ありがとう。ほんとうにありがとう。

『用意はいいですか。さあ参りましょう』

ひよこひよこことツリーがそばにやってきた。

かかとをのびし、手を上げる。

その一生懸命伸びた手の平が、俺の視界を遮った。

## KARTE 3 - 2 河川の街

目の前が見えなくなったと思った瞬間には、俺の耳はどこかで流れる大きな水の音を聞き、鼻は別の湿った土の臭いを嗅ぎ取っていた。

ツリーの手がどく。

俺は既に別の場所にいた。

周囲が砂地から文化的な建築物に変わっている。

トシユナの村はそれこそ集落といった様子で、原始的な紀元前文明だったが、今見る街は紀元が始まったぐらいには進化していた。運河とも言えるような茶色い川が、町の真ん中をぶち抜く形で走っている。

街の中央道路こそは固めた砂の道だったが、歩道は石畳みだった。家なんかはこれまた奇妙なもので、レンガだったり木造だったりとばらばら。

家々の間隔は狭いし、庭はほとんど見えない。スラム街に近かった。

俺たちはさらに川の上流へと進んだ。

現場は川のそばだった。

見晴らしが良く、風が強い。

川の周囲は湿った赤土である。ほんの少しだけところどころに雑草が生えている。ネズミなどの菌を持った小動物が穴掘って住んでいてもおかしくない場所だ。

目の前に広がる大きな川は、やはりえらく濁っていた。

よく目を凝らすと、遠くに大きな緑の丘が見えた。どうやら川を越えた向こうにはそれなりの自然があるらしい。ただ丘といってもあまりに大きく、東京ドーム何個というよりは、エアースロkker個というレベルである。

家の造りはあまり高級ではない。

モンゴルのゲルみたいな豪勢なテントである。

後で聞いた話だが、川が氾濫しやすいので、家は移動できるほうがいいんだとか。確かに陸に行くほどしっかりとした木造の家がちらほらと増えていく。

俺達はしばし街を歩いていった。

そうするとさすがに目立つのか、ダーコがやってきた。

「おやお早い。すぐ来ていただけたんですね」

感心したダーコに案内を受ける。

俺はその中の一つのテントに招かれた。患者はそこにいた。

患者はエイリアンではない。爬虫類もどきの人間だった。

具体的にいうとトカゲである。尻尾もあるし。

ウロコのない水色のツルつとした皮膚に、白い腹。そんでもって長く綺麗な青髪。妙な清潔感、気品さえ感じさせる。あと胸が少し膨らんでいるように見える。一応女性っぽいけど、ここまで来るとオスかメスの判別が難しい。

しかし女性に歳をたずねるのも失礼だというのに、女性に女性かどうかとたずねるのは失礼を通り越したなにかの次元に達するのではないだろうか。

男か女かの違いは重要だが、この際その問題は横に置いておくか。「神よ。まずは彼女を診て欲しい。熱が酷いし、黒い血を吐くのです」

ダーコが説明するように話す。やっぱり女だったか。

患者の職業は漁師。

船を使うというよりは、自身が水中をすいすいと泳ぐらしい。

食べた魚が原因ということも考えられるな。

それから、黒い吐血なら上部消化管出血の逆流だ。

胃酸を含んだ血が黒くなって、喉から吐き出されたんだろう。

よくドラマで咳き込んだのちに血を吐くシーンがあるが、赤い血ならそれほど怖くない。結核の疑いもあるが、結核なんて即死するわけでもないし、大したもんじゃない。

しかし黒い血は別だ。放ってはおけない。

「お嬢さん、意識あるか」

「……はい」

息なのか返事なのかわからない声。

喋るのは辛そうだ。

「おっぱいさわっていいですか」

彼女は「はあ」と呟いて、そのまま目を閉じた。

触ってみると、柔らかさは人間と同じながら、表面が湿ってぬるつとしていた。

俺はその滑りを拭い取って、聴診器を胸に当てた。

通常のドク、ドク、ドク、という音ではない。

常にうるさい。雑音がまじりまくって、？音、？音、共にかわりなくうるさい。

PDA（動脈間開存）に近い音。PDAとは、血管でシャント（血液が本来のルートを外れて流れること）が起きているため、常にしゅちゅかめつちゅか血液が流れ、心音がうるさくなってしまっている。

もちろん聴診器で聞き取っただけでPDAなんて診断はできないし、PDAは先天的要素もある。彼らの心臓がそもそもこういうものであるとすればそれまで。あくまでそれに近い音と覚えておこう。「このようになったのがあと数名。しかしまだ隠れているだけで、今後もこの呪いは増えるのではないかと危惧しております」

どうも酷い集団感染らしい。

今すぐ帰ってしまいたい、病気を前にして逃げ出す医者はいない。

用心しておけば感染は防げるはずだ。

俺はスマホを取り出し、何枚か写真を取った。

お金もだいぶ貯まってきたので、放射線撮影もできるようになってきた。

ならば単純X線撮影をやっておきたい所だが……。

いかんせん放射線診断医でも技術士でもないので、撮影の上手いやり方がわからない。

医者は全員レントゲンが読めると思うかも知れないが、そんなことは一切無い。白い影があったとしても、結核かがんか、そのどちらかしか特定できないのである。

「とりあえず経過観察が必要だな。急いでこの状態を治すことはできない」

ダーコはすんなりと俺の提案を受け入れてくれた。

日本の病院なら、ふざけんな早く治せこのヤブ医者と怒鳴られている所である。

当人の問題ではないから、ダーコ自身が焦っているわけではないのか？

「なあダーコ、あんたはどういう立場の人間なんだ」

「私はこの街の長。皆の不安を早急に取り除くのが私の役目でございます」

「のわりには流暢に話すじゃないか」

「確かにこれは大問題です。しかし神よ、あなたの力を必要としているのは、なにもこの者だけではありません。解決すべき事柄は無数に存在し、私はその無数を減らしてくれることを期待しているのです。街を歩けばいずれわかるでしょう」

意味深な言葉を残すダーコ。

哲学者のような喋り方である。

とにかく病人いっぱいいるから、どうにかしてよって話なんだろう。

「わかった。任せとけ。医者は困ってる人を助けるのが仕事だ」とはいうものの、外出は正直おっかない。

見知らぬ土地だし、周囲はエイリアンやら巨大爬虫類がうようよいる。

もし強盗に襲いかかれてもしたら降伏以外の手はないだろう。貧しい人々の腹は常に飢えている。

ヘタすりゃ俺が胃袋に収まってしまふ可能性だってある。

現に誰かが地面を這うねずみを取って、そのまま生でがぶりと食う光景を目撃した。

人間でいうなら、木になってるミカンをがぶりと食うような感覚である。

こいつらを治せっていうのか。

難易度の高いミッションだな。

「ダーコは俺に町医者業を期待している」

「はい」

「ダーコは医者を探していた。するつてーと、俺以外にも声をかけている可能性が高い。もし先にいた医者を探し出せれば、問題は素早く解決する」

「ならば私やります。がんばります！」

トシュナの鼻が膨らむ。

彼女を連れてきたのは、か弱い女性にもっとか弱い俺を守ってもらったためだったが、当人は医者の手伝うつもり満々のようである。

### KARTE 3 - 3 通りすがりの医者

砂漠の街を散歩する。

が、体力のない俺にとって、徒歩は苦痛そのものだった。

やがて暑さにやられた俺は日陰に逃げて、尻もちをついた。

ぬめつとした汗が流れる。脱水症状手前といった所だ。

『どうしたのですか。テストは開始されたばかりですよ』

俺が顔を俯かせると、必ずやつが現われる。

ツリーは確かに困難な時に助けしてくれる重要なヒロインだ。

同時に、人が失敗すると必ずあざ笑うように出てくる最低な魔女でもある。

「テストって、これもお前が用意した困難だっていうのか？」

『全ての事象について、私が関与しているわけではありません。テストはあくまで通過点であり、目的ではありません。この先に得られるものが私の納得するものであれば、これもまたテストとなります』

「まるで俺が試されてるみたいじゃないか。いい気はしないぞ。俺がなにをした。俺がこれからなにをすればいい。俺になんの得がある」

『テストの目的は単純です。愛するドクターを優秀な医師に磨き上げる事です。それに対しご褒美が欲しいというのであれば、しっかりと用意してありますよ』

「なぜそんなことを」

『愛ゆえですよ、全てはね』

ツリーの口元だけがにんまりと動く。

表情がへたなせいか、どこかうさんくさい。

俺を鍛え上げるのが目的だとすれば、病人を治すのがテストというのも納得できるが。

「で、ご褒美ってなんだよ」

『ドクターの望むものです』

「俺の望むものだったって……」

俺の欲しいもの。

安定した職だな。できれば公務員がいい。

しかしこいつが職をくれるわけもないし。

『誰でも、どんな怪我でも、どんな病気でも治せる、最高の医療技術を差し上げます。私はドクターがその資格を持てるかどうか、そのテストをしているわけです。しかしドクターが望むのであれば、チヨコレートでできた聴診器でもかまいませんよ』

最高の医療技術。

なるほど、それはそれでいい話だ。

なにげにツリーは変な知識や技術を持っている。

俺を育て、立派な医者にし、職場復帰を援助してくれるというのがあれば、俺にとっても悪い話じゃない。

どのみち、日本に住む今までの俺のままじゃ、お先真つ暗だ。嘘ったり、ご褒美が「今までのドクターの経験が宝なのです」なんてオチだったりしても、ここで技術を盗んでいく価値はある。

最悪、ここの生物一匹持ち帰って、論文でも書けばいい。

俺は今チャンスなんだ。

俺は医者をやれる。やり続けられるんだ。

テストを再開する。

まずはこの街がどんな場所か知る必要がある。

そのためにも、できれば同業者を見つけない。

「あの、少々よろしいですか」

おっかないトカゲ男達に、トシユナは礼儀正しく声をかける。

「お伺いしますが、お医者さまを知りませんか」

しかも要求までぶつけて。できた人妻である。

おっかなびつくりで声もかけられない小心者の俺にとって、トシユナの無神経さは非常にありがたかった。

「医者なんていないよ」

小さな唸り声が返ってくる。

誰にたずねてもこの調子である。

俺も丸一日探して医者を見つけられなかった。

街には病人が溢れ、衛生のえの字もない空気が漂っている。

それでいて彼らは居もしない神を信じ、苦しんで死んでいく。

確かにまともな頭を持った医者なら、こんな所で働きたくはないよなあ。

「あんた、もしかしてドクターか？」

すると別のトカゲ男がふらふらしながら寄ってきた。

「ああそうだが」

俺はなにげなく答えた。

この一言の重みを、俺は全く理解していなかった。

「あの金次第でなんでも治すっていうドクターか！？」

「い、いや、その噂はどうかと思うが……」

「頼む、今すぐうちの家族を診てくれ！」

一人が俺の服にしがみついた。

するとそれを皮切りに、あちこちから男達が群がってきた。

「俺のばあちゃん、最近何度か血を吐くんだ、頼む助けてくれ」

「うちの娘、急に目が見えなくなっただんだ！」

「お、お、俺は頭が痛いんだよ、頭があ！助けてくれよあ！」

「嫁が風邪をこじらせてから寝たきりなんだ、頼む、俺には薬をわけてくれ！金は出す！必ず出すから！」

おのおのが必至に声を張り上げ、俺に訴えかけた。

いや、叫んだと表したほうが正しいだろうか。

「わかった。わかったから。診てやるから服を引っ張るな」

周囲を落ち着かせるのには、困難な診察を引き受けなければならぬ。それこそ苦痛に満ちた大きな試練かもしれない。

だが放っておけなかった。

「よろしいんですか。呪いの治療もありますし」

「しょうがないだろ。見捨てられるわけがない」

「どうしてですか。お金ならもう」

「だって俺は医者だからな。医者は困ってる人を救うのがお仕事なんだ」

患者が目の前にいるのなら、見過ごすわけにはいかない。

俺は一人一人の話を聞き、街のすみずみまで歩いて回った。

当然一日二日で終わる作業ではない。

俺は何日もかけて街中を走り回った。

ツリーの思惑通り、俺は医者テストにどつぱりハマっていた。

気がつけば、俺はすっかりこの世界の医者業をこなしていた。寝る時にだけ眼鏡を外す。

その時はトシユナを連れて帰る。

初めの時はトシユナを自宅に連れ込む事に抵抗もあったが、彼女がこなしてくれる俺への介護は、もはやなくてはならないものになっていた。

「あんたも呪いって聞いたけどね。どれ見せてみな」

俺は今日も応診にあたっていた。

ドアもろくに付けられていないぼろぼろの土壁の家に、ぼろぼろのベッド。指で壁をなざると、ぱらぱらと埃が落ちる。

そこに咳ばかりをするエイリアンが横たわっている。

彼らは等しく衛生という基本概念に疎かった。

「三日間以上の発熱。 sore throat (+) (喉の痛みあり) cough (+) (咳あり) sputum (-) (痰なし) 食欲低下。基本疾患はなし。意識状態は鮮明。今朝に嘔吐と水便。腸管蠕動音は正常つと……」

スマフォのカルテにすらすらと症状を書き足していく。

それをトシユナが横目で覗いていた。

いかにもなにかやりたそうである。

「脱水症状が心配だ。輸液の準備だ」

俺がそう指示をすると、トシユナの目が輝いた。

指先が震えて針の扱いができない俺は、医療ド素人の彼女に注射

のやり方を教えた。

注射はそれほど専門的な技術を要しない。必要なのは度胸と慣れだ。やるうと思えば一般人でもできる。まあ一般人で注射器を持ち歩くやつはたいがい犯罪者だが。

おかげでトシユナは注射をやりたくてしょうがないらしい。

鋭利な針を持って、さあ誰かに刺せないかと目をキラキラさせてやがる。

「ラクテックGを500ミリリットル（水分不足に使う輸液） V  
Iー式（ビタミンー式。だいたいB1、B2、B6とビタミン  
C） プリンペラン（吐き止め） 1アンプルを三時間ほどで静脈注  
射だ」

スマフォのショップから、点滴用の道具と薬を買う。

あまり金持ちな患者ではないが、必要費用はダーコから貰っているため、思うがままの医療処置を施せるのだ。

「はい！ よろこんで！」

道具を受け取り、元気良く返事をするトシユナ。

居酒屋の店員かお前は。日本のナースが言ったら訴訟物だぞ。

「あとはラックB（整腸剤）とムコスタ（胃薬）。あとクラビット  
（抗菌剤）を食後に出せばいいかな」

カルテに処方を書き記す。

俺が満足そうな顔を見ると、エイリアンはかすれた声を喉の奥から絞り出した。

「ドクター……、わ、わたしは呪われたのですか……」

「いいや、あんたはただのかげだ。よかったな。薬を飲んでれば治るよ」

「し、しかし」

「心配するな。すぐに良くなる。もちろん嫌なら治療をやめていいんだが」

「えーっ！ ダメですよ、やりましょやりましょ！」

針を持ったトシユナが残念そうな声をあげる。

結局患者は逆らう手段を持たず、俺の治療を受け入れるしかなかった。

日本ではありえない高圧的な診療である。

「じゃあお大事に」

応診を終えて家を出る。

外はすでに暗く、肌寒い。

「次で最後だ。急ぐぞ」

街灯なんて便利な物はない。星空がなければ暗闇同然で危険きわまりない。

最初のうちは懐中電灯を持って歩いたのだが、神の放つ光だと崇められたり、光の先に俺がいるとバレれば、捕まって延長応診をさせられてしまったため、やがて懐中電灯もなにも点けず歩くようになった。

暗闇の中で唯一見えるのは、トシュナの白い肌とエイリアンの赤い瞳だけ。

俺はさっぱりなにも見えん。

なにせこつも暗いくせにサングラスまでしてりやなおさらである。だからトシュナに引つ張ってもらいながら道を進むしかなかった。うゝん。こういう時って、男が引つ張って歩くべきだよなあ。

トシュナの白い体は暗闇でも良く見える。

俺は彼女の尻を眺めていた。大きくて良く目立つからである。

体つきは人間だし、下付きのお尻とか結構そられる感じはするもんで、俺は暗闇に乗じて劣情を催してしまうのだが、ほ乳類的な生殖器のない彼女にどうセクハラしろというのだろうか。

むしろ体に興味を持つと言っても、すみずみまで解剖してしまいたい意味であると言ったほうが正しかったりする。ここの生物を見ていると、医者としての研究意欲が刺激されてしまう。

うん。俺ってそこらへんの性犯罪者よりもはるかに最低な思考の持ち主だな。

「トシュナは帰らなくていいのか」

夜道の中、俺が後ろから声をかける。

「子供がいるだろう」

「子供は母に頼んでおきました」

「じゃあばあちゃんになにか礼をしないとな、俺からも」

「おみやげを持って行ったら喜びます」

あんな集落なら、都会の品を期待したいだろう。

そういえばトシュナにお金を渡すのを忘れていた。

手伝ってくれているんだし、真つ当な賃金は払わなきゃいけない。いくら払うべきだろうか。

トシュナにたずねても、いいえ私はいいですよなんて遠慮しそうだ。

「いくらかお金を渡そう。どのくらい欲しい」

「いえ、私はいいですよ。お手伝いできるだけで嬉しいんです」  
ほら。

ならこちらで勝手に金額を決めなければならない。

俺の取り分はゼロでもいいとして、薬代や器具の分を考慮するとそれほど渡せない。いずれは高級な医療器具も買いたい所である。しかしずっとトシュナの世話になりっぱなしの身としては、相応の額をあげたいくもある。

迷ったあげく、俺は貧乏人たちから巻き上げたお金を差し出すことにした。

高価なんだか、潰した王冠なんだかわからない丸い金属たち。

俺が持っけていても仕方がない。持っていた所で価値もわからない。

「え、あの……、このお金は……？」

「俺が君に支払うべきお金だ。受け取ってくれ」

「で、でも……」

「いいか。俺は君を雇ってる。買ったんだ。受け取り拒否は許さないぞ。まだまだたくさんやって欲しいことがあるんだ」

トシュナはお金を受け取っても無反応だった。

はあとか呟くように返事して、うんともすんとも言わなかった。

少なかったんだろっか。

## KARTE 3 - 4 風呂場の誘惑

家に帰ると、俺達はまず風呂に入る。

トイレと一緒にあったとても狭い風呂であるから順番こである。俺が便器に座って、後ろから彼女の入浴を眺める。変な意味じゃない。洗いがヘタクソだから監督してやなきゃいけない。ホントだ。嘘じゃない。なにせあの世界からどんな病気を持ってきているかわかりやしないから。

「もつとちゃんと洗いなさい。医者に残しは許されない」

「で、でも、後ろ届きません！」

「背中むけなさい」

彼女は髪という葉っぱを持ち上げ、形の良いお尻をこちらに向けた。

色は白すぎるが、少し締まった尻は美的な要素を含んでいる。触ってみると、実にもちもちしている。もみごたえのある尻だった。

「……あ、あの、どうしてお尻ばかりを洗うんですか？」

「待ってくれ。今俺はお前のケツから手を離していけないと思っている」

人間的な顔ではないが、人間的な体を持っているがゆえ、俺は男性的な欲求を満たす行動をしていた。……というわけではない。むしろ、そうすべきだったのだが。

俺はセクシーなシルエットに見惚れたわけではなく、その中身について深く感心を持っていた。

何度見ても排泄器官が片方しかない。

ならば従来の排泄機能はどのように変化しているのだろうか。

気になって仕方がなかった。

こればかりは解剖しないと、俺とどのように臓器が違うかわからない。もしかして中身も葉緑素でできていたりするのだろうか。

解剖したい。中身がどうなっているのか確かめたい。

「……ドクター？」

「な、なぜだ……。なぜ俺は……」

本来は下心を出す場面。なのに俺は彼女の表面的な魅力よりも、生態的な秘密に興味を示していた。いやらしい想像ではなく、メスを持ち、肉を裂いて、臓器を掴むシチュエーションを想像しながら、生物として興味が生まれるのはわかる。

だが道徳的な心を忘れてまで、研究意欲に負けるような性格だったろうか俺は。

手を離してはいけない。

女性的な容姿に興味を持つべきだ。

『ここでなら、その生物を意のままに殺した所で誰も咎めませんよ』すると俺の心を見透かしてか、悪魔の囁きがやってきた。

姿は見えず、声だけが俺の脳みそに入ってくる。

『なんの価値もない個体が、医学的発展のために消えていく。犠牲のために生まれた知識は全ての人間を救う。それは彼女にとっても幸福なのでは？』

「ば、ばかな。そんなこと……っ」

『気にすることはありません。あなたが持っている知識も、そうした犠牲の上に成り立っているのです。今更否定しても愚かなだけ。問題は自分がやるか、他人がやるかの違いでしょう。口を開けて物乞いをする愚民ならともかく、あなたは選ばれた医師なのです。立ち止まることはできませんよ？』

髪を持ち上げたままの無防備なトシユナ。

ツリーの声は、実に甘く、とろーとした響きを持っている。

聞いているととても心地良い。身を委ねて、眠ってしまいたくなってくる。

言うこと聞いてしまいたくなってくる。

俺の迷う心を、下から優しくくすぐってくる。

しかし「はい」とも言えない。

欲求のために人殺しなんてできるはずもない。

『さあ。小さな障害を踐んだのちに、大儀があるのです』

「うるさいっ！」

俺は頭を振って打ち付けた。彼女のケツに。

尻の割れ目に鼻を突っ込み、歯を食いしばった。ぎりぎり食いしばった。

「ドクター……、これは……、なんの意味が……？」

「瞑想中だ！　悪しき邪念を、もう少しまともな悪しき邪に変えるための！」

「それは……、私のお尻に顔を入れなければできないのでしょうか？」

「そうだ！　ちょっとお尻貸してください！」

俺はなるべくいやらしいことを考えるようにした。

生産的な研究意欲を拭い捨てるため、とことん無駄なことを考えるよう努めた。

するとやがてツリーの声も聞こえなくなった。

「水を流しなさい。俺のことはきにしないでいいから」

ケツに顔を突っ込んだまま、頭に水をかけられる。

排水溝に流れる水は、やはり茶色い砂混じりの水である。

確信できる。あの世界は嘘ではない。

俺はあの世界にいたんだ。

そして彼らはあの世界で生きているんだ。

眼鏡を通して、俺はどこかにあるあの世界に行っている。

どうやって、と言われれば詳しくわからないが、なんのためにと言われれば、医者としての使命を果たす以外、他にないだろう。

するとツリーは俺の想像の産物ではないのか……？

なんのためにツリーは俺へ接触。

いやいや、今はひたすら無駄なことだけを考える。

先に進む努力をしてはいけない。とにかくバ力なことをするんだ。

## KARTE 3 - 5 欲求

風呂から上がる。

散々いやらしいことだけを考え抜き、邪念を払った俺。  
こうなればやることは決まっている。

「よし、さっそくだ。やってもらおうか」

「え、はい」

「ごはんつくってください！」  
頭を下げる。

トシユナは「はあ」とだけ返事して、台所に立ってくれた。

飯の作り方もだいぶ教え込んだ。

魚を捌く原理は一緒だし。焼き魚なんかはあまり教えなくても完璧にやってくれる。

さすがはできる主婦。焼き魚なんか学生時代でも滅多に食わなかったわ。

「うまい！ うまいぞ！」

並べられたあじの開きに、醤油をかけて食う。

日本人は贅沢だなあ！

「き、機嫌、いいんですね」

「今の俺が不幸に見えるか」

俺は飯を胃袋にかき込んだ。

しかしトシユナはやはりよそよそしかった。

普段なら飯が美味いと褒めるものなら、ものすごく単純に喜んでくれるのに。

気になってよく観察してみると、どうも様子がおかしい。

言葉にはきもないし、呼吸もどこか変だ。

風邪でもうつされてしまったのだろうか。

なにか言いたげな様子だったのは体調のことか？

医者の手伝いをしているのに、風邪を引いたことに負い目を感じ

ているのだろうか。

俺もよく「医者のかせに体調不良だなんて」と言われた覚えがある。

それに見た目も少し違っていた。

彼女の頭のとっぺんには、つむじならぬつぼみがある。さすが植物人間だ。

その頭のつぼみが、多少ながら開いているのである。体調不良が原因かどうかはわからないが、どこかおかしいのは間違いない。

もしかして咲くんだろうか。

水をかけたりすると咲くんだろうか。

俺は抑えていた研究意欲を溢れだたせてしまった。

もう我慢ならない。食欲よりも、性欲よりも、研究欲が抑えきれない。

トシユナのような人種もそうだが、あの虫やエイリアン、全部がっさばいて記録したい。

肺機能はどうなっているのか。循環器はどうなっているのか。消化器はどうなっているのか。脳みその大きさは？ 脊椎の様子は？ 考えるだけでも興味がわき出てくる。

「なあ、ここっで触ってもいいか？ 頭のこと」

俺は医者としての衝動抑えきれず、ついたずねてしまった。

「え、あ、はい。どうぞ」

でも了承されちゃったので、俺の手は止まらなくなった。

頭を触ってみる。

髪の毛は硬い。触感はやっぱり葉だ。

肌触りもつやつやした葉っぱそのもの。

力を入れれば横から引きちぎれそう。

やっぱり葉は動物性の毛なんだろうか。

それとも葉緑素がつまっていて、光合成をするんだろうか。

ならばなんのために。

もしかしてこの頭から脳に酸素が運ばれるんだろうか。

だとしたら凄い機能だぞ。俺にも欲しい。

肺や心臓に頼らず、脳に酸素を送れるだなんて画期的すぎる。

これなら心筋梗塞や脳梗塞といった重大疾患が起きても、脳にダメージが残りにくい。

ならば片麻痺などの神経障害や意識障害といった、重大な後遺症も残らず社会復帰ができる。

脳ほど酸欠に弱い箇所はない。

人間にとって脳よりも大切な部分はない。あっても心臓だけだろう。

うつむ、すごいぞ、これは人類の究極進化だ。

もしこんなことを俺たち人間にできたら、どんなに素晴らしいことか。

俺の病態ゲノムの研究分野とちよつと被ってる部分もあるし、非常に感心が持てる。病態ゲノムはいわゆる遺伝子解析が主だが、目的はより病気や障害に強い体を見つけることにある。トシユナはその目的を叶えている。

ああ、他の医学者と一緒に語りたい。

それからこのつぼみ。

これも興味深い。

髪をことまかに調べていると、ほんの少しずつつぼみが緩み始め、中から朱色の花びらが見え始めてきた。

おお、すごい。こりゃすごい。

頭頂部の花に触れてみる。

やはり植物の花びらだ。こっちはどんな機能があるんだろう。

「うつむ」

俺は喉をつならせながら、花びらの開花を期待した。

期待が膨らむと、力がつい入り、腕の痙攣がまた始まった。

小刻みに振るえる指先が、綺麗な花びらを揺さぶる。

最終的に全開してくれた花は、まるで帽子のように大きく咲き開き、俺の鼻までその甘い香りを運んでくれた。

黄色いめしべが見える。

触感はやっぱり花のめしべだ。

花について詳しい訳じゃないが、人間的身体にいたいどんな利得があるのだろう。

くう。解剖したい。

解剖したあい。解剖したいよお。死体一匹くれないかなあ。

興味湧かせすぎだろ、この世界の生き物は。

「だ、だめです……っ！」

と、あまりに熱中すぎた俺を、トシユナの張り詰めた声が止めた。

さすがに痛かったんだろうか。

「そ、そ、それ以上はあの……っ！」

「いや、すまない、つい。ん、これは花の蜜か？ ……どれ」

「や、あ、ゆ、指、入れちゃ……っ！」

「なんだ、痛か」

「これ以上されたら、受粉しちゃいますう！」

顔を真っ赤にし、肩で息をするトシユナが倒れた。

なんだって、受粉だって？

「夫にもこんなことされたことないのに。ああ、ごめんなさいあなた。でも逆らえないの。こんなに激しく、それでいて優しくいじられちゃ……っ！」

「お、おい、ちょっと待て。なんだ。一体なにを言ってるんだ」

「え、これから私を抱かれるのでは？」

俺は目玉が飛び出しそうだった。

「な、一体どうしてそうなるんだっ！？」

「だってこんなに大金を渡されたから、私はそういうことをするんだなって……。それに私は買うっていったから。じよ、女性として買われたのかと……」

「ちがうちがうちがう。大金って、体売る金額じゃないだろ」

「あのような量、何人かの女性を一晚買えます」

「じゃあトシユナにとってその金額は？」

「夫の給料三ヶ月分です」

俺は地方格差なんてものを考えていなかった。日本人ゆえに格差という感覚をそもそも持ち合わせていなかったのだ。

トシユナの村で手に入る金と、ダーコの貿易を担う街で手に入る金は違う。都会にとつちやある程度の小遣いでも、農村集落にとつては大金なんて話は良くある。

それに文明度が低いほど、売春の金も安いはずだ。

食料や衣服よりも、女性のほうが安い時代なのかもしれない。

だからこんな金握らされて体触られたら、勘違いするのも無理はない。

「すまない。そんなつもりはなかったんだ。医者としてな、お前がどつという体の構造してるのか興味がついわいちゃって。だって珍しいんだもん。えへっ」

「ではこのお金は」

「それはほんとうにトシユナの労働にあわせて出したお金だ。……ところでなんだ、また興味本位で聞くんだが、受粉ってつまり子供を宿すことだろ。お前らのその、営みってどうやるんだ？ 動物的にやらないんだろ。……いや、女性になに聞いているんだ俺は」

俺は懲りなかった。

珍しくつてしょうがない。興味がわいてしょうがない。

「あの……、こう、頭を合わせてですね……、それでよければ種ができて、あとは栄養のある土に入れて、お水をあげながら」

「ほほう！ なるほど！」

俺の興味心は今にも暴れ出しそうだった。

これでも研究員の端くれである。

「つまりトシユナは有胎盤類や有袋類を脱却した種族なんだな！」

これは凄い。

俺は常々母体で子を育てる意味はあるのかと考えていた。

母体にとつては重荷になるし、妊娠中毒なんてしゃれにならん問

題を抱えたり、大量出血したり、はたまた母体ごと死んでしまった。なんて話はごく当たり前にある。

今の人間にとって、敵に襲われる危険性なんて皆無だ。

ならばタマゴのように外で育てれば、少なくとも母親の負担や危険性はなくなるんじゃないかと思っていた。それが今ここで実現されている。

しかもだ、これなら短期間で多くの子孫を残すことも可能になる。しかもしかもだ、羊水みたいな胎水がなければ加齢に影響されないため、高齢出産になろうとも安心して産めるかもしれない。

種をより沢山残せるのは、動物学的に見ても優位であること間違いない。

すごいぞ！ おおすごいぞ！

考えるたびに合理性が光る！

まさしく人類の超究極進化だ！

「あの……、そ、そろそろ、いいでしょうか。ちょっと、花開きっぱなしなのは恥ずかしいので……。中心の奥は家族にも見せませんし……」

## KARTE 4 - 1 私は医者ではありません

まるで長年やめていた医者仕事を取り戻すがごとく、俺は走り続けた。

付き添ってくれるトシユナは常に勉強熱心だった。

教えること全てに感心を持ち、輝く瞳を向けてくる。

俺も学部一年のころはこんなだったかなあ。

街灯なんて便利なものは存在しないから、暗くなる前に用事を済ませるしかない。

しかしトシユナは役に立った。

特に外科処置の面で。

なにせ俺にとって外科は専門外だし、指先を使う作業は不安である。

試しにトシユナに現代的機械縫合をやらせようと、持針器とアドソン（外科用ピンセット）を与えてみるた。

当然ながらヘタつぴだし、俺だって内科医だから高度な外科処置なんて教えられるが、それでもトシユナは必至になって皮膚縫合を学んでいた。

医者のない街だから、患者は内科診療だけでは収まらない。時には痛々しい外傷を負って、俺の所に駆け込んでくるやつもいる。

「そうだ。上手いぞ。最後にそこに糸を通して」

今日も腕を切ったエイリアン相手に機械縫合をやらせていた。

へたつぴの糸通しは血をじゅるじゅると吹き出させ、なんともグロテスクだった。麻酔をやらなきゃぶん殴られていた所である。

最後に包帯を巻いて、治療完了。

患者は別れ際まで痛みを堪えていた。あくまで止血だけの治療である。

「さあお夕飯にしましょう。血を見てるとお腹が空きますよね」

笑顔で提案するトシユナの言葉は非常に頼もしかった。男が狩猟して、女が料理するような生活をしていれば、動物一頭を解体するぐらい慣れたものなんだろう。

街は夜になっていた。

今日は星が出ていて、うつすらだけど周囲が見える。

街の中心部の道路に出店屋台が集まっていた。

はじめのうちは気がつかなかったが、良く見ると夜でも店がやっているのだ。

せつかくだから食わない手はないだろう。

周囲には食欲をわかす臭いが立ちこめていた。

脂ののった肉の焼ける臭いは格別だ。

医者になるためには、血を見た後だろうが、内臓を見た後だろうが、メシが喉を通らないんじゃない。

むしろステーキを食おうとしてナイフを持った瞬間、あ、これさつき人間の皮膚切った作業に似てる……、なんて思い出して爆笑できなければならぬのだ。

どう考えても喉に通るほうがおかしいんだが。

「ここにしましょう」

屋台のそばに置かれた樽椅子に座って食事をする。

食べた野菜とか肉をこっちゃん煮したスープのようなものだった。

あずき色のとろっとしたスープ。味はコンソメ風味。

たぶん日本でいうならシチューかカレーだろう。

まず臭いがいい。

そして十分加熱されている。衛生面での評価は大切だ。

「あんたドクターかい」

すると屋台のオヤジが俺に声をかけてきた。

トカゲ男が、頭に頭巾をかぶっている。

どこの世界の料理人にも帽子は欠かせないのか。

もちろん俺はオヤジを知らない。しかし向こうは俺を知っているようである。

「俺の弟があんたの世話になつたつてね。いや助かったよ。ろくに金も払えなかつたのに、ちゃんと診てくれただなんて。これは礼と  
いっちゃなんだが」

オヤジはウォッカのような飲み物を俺たちの前に置いた。  
明らかにアルコール臭がする。

酒は飲まないようにしているんだが、こつ目の前に出されるとなると。しかも感謝の気持ちで出されてしまうと、飲まないわけにも  
いかないよ。

俺はついクイツと酒をあおった。

「水みたいな酒だな」

しかし悲しいかな、酒造技術はさっぱりなもんで、酒は全く発酵  
していなかった。これじゃ消毒薬を飲んだほうがまだ酔いが回る。  
「いけるじゃないか。ほらもつとどうだい」

自動的に酒が追加された。

酒は軽くしか飲まないと決めていたが、これほど薄いと水のように  
に飲めてしまう。

「今日の患者さん、目が見えるようになりましたね」

メシを食いながら、トシユナが話かけてくる。

こつして長いカンファレンスが始まるのである。

「すごいです。さすがはドクター！目の光を取り戻すだなんて」

「あれは一過性単眼失明だ。一時的に脳の一部に血がいかなくて、  
視力がなくなっただけだからな。ステロイドで血管を治してやれば  
どうにかなる」

「ステロイドとは？」

「炎症を治す薬っていうか、表面をキレイに治すもんだな。ぼこぼ  
こに歪んで血の通いが悪くなつた血管を治すんだ」

「頭の痛みもありましたね」

「虚血性の頭痛だな。急に立ち上がって頭が痛くなることがあるだ  
ろ。あれは血が下に押しつけられてるから、脳に血が足りてないつ  
ていう警報の痛みなんだ。つまり同じように血管の炎症で血が通わ

なければ頭が痛くなる。治せば元に戻るってわけよ」

「では足の悪い患者も、すぐ良くなりますでしょうか」

「あつちはダメだな。足腰に異常はなかったし。となれば神経異常になる可能性が高い。バビンスキー反応があっただろ。もし頭頂葉部の髄膜内腫瘍だったら……。脳みそをベロツと出さないと治らないな」

「はあ。ばび……？ 腫瘍？ どういう意味でしょう」

「頭頂葉って頭のとっぺんでな、下半身の感覚が詰まってるんだよ。そこにデキモノができて、脳を押し殺してる。だから足腰が動かない。神経に異常が出ると、足の裏が反り返るバビンスキー反応が現われる。単純なロジックだ。現に始め地図描かせてみただろ？ 覚えてるか」

「家の場所を描かせましたね。正直なにを書いてるのかさっぱりでした」

「ありや頭頂葉部の処理機能が低下してることを意味するんだ。CTでもしなけりゃ詳しくわからないけど」

医学の話を始めると終わり見えなくなる。

知らず知らずと飲み過ぎてしまった俺は胃をさすった。

酒は気分が良くなる。好きだ。

しかし酔いが冷めたあとの苦痛を考えるとあまり飲みたくない。

飲みたくないんだが、体が求めてしまう。

頭がふらふらしてきた。

ぼーっと前を見ると、時折壁が動画になる。

さっき飲んだ薬が効いてきた。

薬を飲んだ後に酒を飲むって、もし俺が医者なら絶対にやらない愚行である。

## KARTE 4 - 2 未来永劫なにもしない医者

夜風は少し肌寒い。酔った頭も冴えてくる。

日本の時計を使って計算するに、おそらく今は夜中の十一時ぐらいだろう。時間周期は二十四時間で間違いない。やはり地球のどこかであることは確かだ。

それとも偶発的に地球と同等な星でもできたっていうのか？

ありえないな。

「ああ……。気分が悪い……」

考えようにも、酒と薬の最低コンボを決めた俺に、鋭い思考回路は作動しなかった。

寝るしかない。

この苦痛を和らげてくれるのは十分な大きさを持った柔らかい布団だけ。決してパイプ椅子三つを並べて作ったベッドじゃない。ああ、研修医時代の嫌な思い出だ。

「酒を飲んでしまった。恐らく俺はまともに起きられないし、最悪失禁もする。ごめんなさい。今から謝つとくから、介抱してください」

絶対にモテない台詞をつらづらと並べ、俺はトシユナを自宅に誘い込んだ。

それで白衣も脱がせてもらった。

俺は調子が良くないと、自分で洋服のボタンを外せない。ちなみに私は今年で二十七歳です。

トシユナは小さくはいと返事をしてくれた。

にしても、トシユナはさっきから妙によそよそしかった。

いつもなら黙ってても上着の一枚でも脱がしてくれて、それを綺麗に畳んでくれるほど気の利く人なのに、今は俺から一步距離を開けている。

「もしかして酒臭いのダメなのか」

「い、いえ、主人もよく飲みますし」

トシユナがまた微笑む。はきがない。

なにかをこまかすような笑い方である。

酔っている俺の感覚がイカれてんのか。

でもなにかひっかかる違和感だ。

俺は頭の後ろを掻いた。

それはごく自然な動作であって、なにか特別な意味はなかった。

だがトシユナにとっては特別な意味があった。

俺は疑問を確信にすべく、今度は手を大きく振り上げた。軽く拳を握って。酔いで意識しなかったが、腕は振るえていた。

トシユナはさらに身を引いた。過剰なまでに素早く反応して、後ろにあるベッドに足を取られ、そのままずっと白い布地の上に腰を落とした。

俺を見上げるその瞳は小刻みに揺れている。

俺は振り上げた手をゆっくり下げ、トシユナの長い前髪を捲った。そこにあったのは、鋭利な刃で深く傷つけられた白い頬だった。

片方だけ不自然に長い前髪は、これを隠すためにあったんだ。

「どうやらお前の夫は酷く暴力を振るうらしいな」

俺は振り上げた手をゆっくりと下げた。

今のは条件反射だ。

犬の前に握った拳を見せると、頭をかがめて目を閉じる。

犬はなぐられると思うからである。それとほとんど同じ反射だ。

茶色い川辺で手を差し伸べた時から変だった。

あれは俺が嫌いだとかそんなわけじゃない。差し伸べられる手が、トシユナの中で暴力に結びついていたから、条件反射的におびえていたんだ。

「そいつが酒を飲むと殴られたりするか」

トシユナは肯定さえしなかったが、否定もしなかった。

俺が酒を飲んで不安げな様子を見せたのはそのせいだろうな。

「お酒のことです。朝になればちゃんと謝ってくれて」

「実は優しい一面もある……、か？ でも相手を怒らせないように我慢したりするんだろ？」

「それは当然のことです。私は夫の家に身を置いたんですから、私に意見はありません」

典型的なDV (domestic violence) だった。

文明の度合いからいって、この世界で男尊女卑的思考はごく普通なんだろう。社会文化に俺がとやかく言えることはない。

しかし社会がどうだからって、こんな気の弱い真面目なやつを殴っていいわけがない。

見てみる。手を差し伸べただけでおびえてるじゃないか。

社会がなんだ。俺は医者だ。治せるもんは傷だろうが病気だろうが心だろうが治してやらなきゃいかん。できなきゃ医者じゃない。

俺は今まで精神医療なんてアホにしていた。精神科医なんて今までなにもしてこなかったし、これからもしない医者だと思っていた。患者と医者を並べたら、どっちが患者だかわからない者だと思っていた。だから彼らの考えなんて、授業の単位を取る以上の価値観を持つては接してこなかった。

一時間一万円も取れる丁寧な精神的ケアは無理だ。

今更付け焼き刃であれこれ考えたってしょうがない。

俺は俺なりに治療するぞ。

「暴力を振るわれた後、人が変わったように謝られる。怒らせなければいい人だと思って、自分は押し黙って、相手の機嫌を取ることしか考えない。相手が怒るのは自分のせいだと思う。違うか。でもそんな所だろ」

「い、いえ。……その、わかりません。でも私はこれでいいと」

「意識ではそう思っているかもしれないが、体はいいと思っていならしい。見る、手を出ただけで身を守る姿勢に入ってる。いいかトシユナ、今のトシユナは病気だ。治療すべき心を持っている。残念ながら俺の専門じゃないけどね」

俺は手をもう一度前に出した。

やっぱりトシユナの身が一瞬引いた。

「他の男はどうか知らんけど、なにも俺の手にまでおびえる必要はない。俺の手は絶対暴力を振るわない。実は優しい手なんかじゃないぞ。全部優しい手だ」

俺は差し出した手を、そっとトシユナに近づけた。

俺の手がトシユナのあごの下にまで伸びる。トシユナはその大きな瞳で、俺の軽く開いた手を見ていた。

「ヒポクラテスという医者がいる」

そのまま少し離れた話を持ち出す。

今は治療中だ。感情論ではなく、理性と筋道を持って、まず頭から理解させたい。

「医学の父とも言われてる大昔の医者だ。それで俺たち医者は彼の教えと誓いを、今でもしっかり受け継いでいる。恩師に尊敬と感謝をささげる。良心と威厳をもって医を実践する。患者の健康と生命を第一とする……、とかね」

正直全部は覚えていなかった。

海外の医科大学に行くと、卒業証書に彼の誓いが書かれていたりするんだが。

「まあだな、そういつた誓いを立てた偉い人の言葉があるんだ」

俺は差し出した手をグーにして握った。

もちろん腕はまだ振るえている。

昔コントで酒を飲むと手の震えが止まる料理人なんてものを見たが、俺の腕の揺れはそれに似ている。

ただ、俺の場合、酒を飲もうが治るわけじゃない。

意識ははっきりしているのに、神経が言うことを聞かないんだ。

「患者を扱う際の心得は二つ」

人差し指を立てる。

「ひとつ、治療すること」

中指を立てる。

「ひとつ、傷つけないこと」

最後に手の平を広げた。

「俺の手はその教えを守ってきた手だ。もし俺が医者でありたいと思うなら、この教えを絶対に破らない。そして俺は生涯医者であるうと思ってる。だからトシユナを傷つけることはなにがあるうともしない。これは……、そうだな、誓いだ。俺の誓いだ。約束しよう。どうだ。その誓いに問題なければ、試しに俺の手を触ってみてくれ。綺麗じゃねえけど、しっかりしてねえけど、時々こうやって振るえたりしてるけど、それほど酷いもんでもないからさ」

トシユナはそつと手を伸ばし、恐る恐る俺の指に触れた。

まるで気味の悪い虫にでも触れなければならないような様子だったが、トシユナの手は次第に震えをなくし、やがて俺の手を握れるほどになった。

「まだ怖いかな」

「いえ、平気です……、すみません……」

「謝るな。顔を上げる。いいか、確かに今すぐ体を慣れさせるなんて言わない。ゆっくりでいいんだ。たまに俺の手を触ってみろ、俺は拒否しないから。絶対に怖くないから」

トシユナは俺の手を握ったまま、こくりと頭を下げた。

変な約束をしたもんだ。回りくどいやり方だ。俺が一端の精神科医なら、週に二日、一時間会っただけで解決できた問題だったかもしれない。

「治療はゆっくりやろう。いずれよくなる」

「すみません……、なにからなにまで……、私のために」

「だって俺はドクターだからな。困ってる人を助けるのが仕事だぜ」  
「だができないからってやらないわけにはいかない」

これからできるようにしよう。

救わなければいけない者は、今救えなくともいずれ必ず救う。

これが俺の誓いだ。

## KARTE 5 - 1 猟奇的な彼氏

街を歩いていると、偶然にも、一つのいいものを見つけた。

「こりゃ死んでるな」

道ばたに、ごろんと転がるトカゲ男の体があった。

聞けば昨日までは動いていた盗人だという。

盗みを働き、反撃を受けて、この有様になったんだとか。

確かに頭に殴打された傷跡がある。

死因は脳内出血だろう。

住民にとってはやっかいなゴミ。俺にとっては新鮮なお宝。

俺は死体を見て喜んでいた。

抑えていた研究欲が吹き出てきたのである。

縁もゆかりもない彼を、俺は金を使って運ばせた。

「ドクター、どうなさるんですか」

「解剖を一回やってみたかったんだ」

他人がやってくると面倒なので、俺は街から離れた場所に移った。

汚く乾燥した雑草が乱暴に生える大自然の上で、健康的に人体解剖を行う。

日本もこうした実習をしたほうがいい。暗い所で解剖するから、重苦しくなってしまうんだ。これなら気が滅入りにくい。

少々補足しておくが、人体解剖に使う献体のほとんどは、本人の許可を得ていない。多くは無縁仏が病院に運ばれ、医学の礎になっているのである。

死人に口なしとはこのことで、俺が了承を得ずに死体を捌こうとも、決して医学的常識に反しているものではない。道徳的常識は別として。

「トシユナは戻っていいぞ、気持ち悪いだろ」

「いえ。別に慣れてますので」

なんとも心強いお言葉なこと。ほればれするよ。

解剖の手順はいろいろ流派があるかもしれないが、まず手足を落として、皮膚をはぎ、首を切って、頭はスイカみたいにパカッと中心から二分割するのが俺の手法だ。

俺の学生時代の解剖実習はそうした。

授業中、女子の一人が吐いたのを覚えている。

今思い出せば懐かしい。俺の青春だった。腕の筋肉をばっさり切っちゃって、試問の時にどれがどの筋かわかんなくなった思い出がある。最低な青春だった。

解剖学の実習室にあるメスは基本的に木製である。

ドラマで見慣れる綺麗なステンレスのメスではない。

ステンレスは油に弱く、人を丸ごと切り刻むと、ぬるぬる滑って使い物にならなくなるからだ。

まずうつすら毛の生えた皮膚を剥いで、筋肉を眺める。

「ん~~~~~ん?」

俺は首を捻った。

今度は血管と神経の位置を確認しながら、筋肉をはぎ取る。

「んん~~~~~ん?」

俺はまた首を捻った。

なんだこりゃ。なんだこの足は。

「ナイフかなにかあるか」

「あります」

なにを要求しても、トシユナの口から出てくるのは頼もしい返事だけである。しかも手渡されたのは、やはりインディージョーンズが持っていたいそうな巨大ナイフだった。

「あんたの死、おろそかにしないよ」

俺は手を合わせた。

この世界で手を合わせる宗教的行為になんの意味があるのかと思うが。

俺は献体の喉元に受け取ったナイフを入れた。

ここで知って得する豆知識を披露しよう。

お手軽に人間の首を切り落とす裏技だ。

首切断のコツは骨を避け、椎間板を狙うこと。

椎間板は柔らかく、刃が通りやすい。

だから首を切るなら真っ直ぐ押し込むより、何度か軽く方向転換したほうがいい。

ぜひ人の首を切り落とす機会があつたら、これを実践して欲しい。首だけになつてしまうと動物である。人間を切るよりはいくらか気が楽だった。

首を切り落としたら、今度は鼻頭から縦にナイフを入れる。

ノコギリのようにきざきざとした刃先が、力任せに骨を砕いてくれる。

パカツと縦に割れる頭蓋骨。

脳みそはかなり大きい。人間並みだ。

喋るし考えるし当たり前だろうか。

人間の脳は神経解剖学の実習で細かくスライスした記憶がある。解剖学と神経解剖学は単位が別だった。やはり恐ろしく、そして鮮明な記憶として残っているのは後者だ。なんてったって死んだ人間の顔見ながらやるのだから。

しかしそれが医者になるための道。人を救うには、それなりに手を汚さなければならない。綺麗なまま正義を貫ける人間はいない。例えそれが神であろうとも。

## KARTE 5 - 1 猟奇的な彼氏（後書き）

本当はこの最後に「秘密を知ったな」と金田一ばりに後から襲われて別の場所に分岐する予定だったんですが、文字数の関係で諦めたという困ったシーンです。

KARTE 5 - 2 最新のな手がかかり

「ん  
ん  
ん  
ゝ  
ゝ  
ゝ  
つ  
？」

再び俺の首が捻られ始める。

冷や麦みたいな神経の位置を細かく確認する。

疑問が強くなり初めてくると、今度は乱暴に腹を裂いた。

あまり丁寧にはやらない。

ある程度の臓器や神経位置、体の構造を理解する。

そして俺はある疑問を、ある結論に変えた。

「こりや人間そのものだ」

毛並みこそ違えど、しょせんは表面。皮膚と筋肉をはぎ取ると、骨、臓器、血管、神経、その約九割近くが俺と同じである。

「なにかわかりましたか」

後ろから声をかけられ、俺は意識を周囲に向けた。

辺りは少し寒くなり、日も傾いている。

俺は解剖に熱中しすぎて、時間が過ぎるのを忘れていた。

「こりや人間そのものだ」

同じ言葉をくり返す。

トシュナは困惑したように答えた。

「それは……、当然なんじゃないでしょうか」

「どうしてだ」

「彼も私も、同じ人間ですよ」

んなバカな。

俺の体は人類五百年の歴史、いいや、この人体構造が確立するまでのたび重なる進化の歴史が作り上げたものだ。

百歩譲って人類の進化形態が生き物にとって最高のものであり、  
 なんであれ、ほ乳類はこの体構造に到着するでしょう。しかしだ、  
 しかしそれにしても見た目が多種多様すぎる。肌の色がどうだとか  
 というレベルじゃない。

俺はとめどなくあふれ出てくる疑問に身震いを起こした。  
気がつけば日が暮れていた。

俺は一旦ナイフを置いた。

これは進化の果てというよりも、人間を基礎にした進化と考えた  
ほうが自然だ。

元が同じであれば、いかなる変化があっても、所詮はX1、X2、  
X3の違い。全ての種族にはXという共通した部分が残る。

これは人間の進化の慣れ果てなのだろうか。

ここは地球の慣れ果てなのだろうか。

人間の遺伝子操作技術がどう進歩するなんて俺には想像もつかないが、この世界の住人はそれぞれ人間を祖先とした進化の結果なの  
かもしれない。

「ドクター。そろそろお帰りにならないと。夜道は危険です」

「あ、ああ。じゃあコイツを埋めてやるか。放置して騒ぎになつたら  
大変だしな」

どうせ死体に身内はいない。

しかしこのまま放置するわけにもいかない。

俺は硬い土を掘って、献体を埋めてやった。

もちろん埋めたと云っても土を軽く被せた程度で、本格的に穴を  
掘ったわけじゃない。

一段落付くと、俺は手を合わせ、念仏を唱えた。

この死体に仏教信があるとは思えないが、これはあくまで俺のため  
に唱えている。だから他人がどうかは関係がない。

俺が念仏を覚えたのは、医学部に入ってからだ。

医者は多くの生物の死に関わる。

その過程で、一つの命になんの価値も感じず、なんの尊さも感じ  
ず、その終わりを受け流すなど俺にはできなかった。

だから一々念仏を唱える。

それは誰のためというよりも、自分に負い目を感じないためであ  
る。

せめてこのぐらいすればいいだろう、なんていう勝手な気持ちが俺を楽にさせてくれる。もちろん同級生には良く笑われたが。

「で、これをどう思うよ」

全てが片付き、俺は米粒ほどの物体をピンセットで摘んでいた。はつきりいつてゴミにしか見えない。

そこらへんに転がっていれば、絶対に気にしないほどの黒い塊である。

俺が注目したのは、このゴミが遺体の頭部から出てきた点である。いくら頭を殴打されたとはいえ、頭蓋骨の中にまで物質がはい入ることはまずない。入るとすれば、頭がぱっくり割れているはずだ。だからこの物体は、『予め入っていた』ことになる。

初めは血栓かなにかと思ったが、そうでもないらしい。

ために水で洗って、スマホのカメラで拡大撮影してみようやくわかった。

「なんで頭に半導体チップがあるんだ」

それは見慣れた小さな機械の部品であった。

なぜかはわからないが、こいつの頭には半導体が入っていた。

「おい、ツリー。いないのか。返事しろ」

ちよつと小声で呼びかけている。

しかし反応がない。

自称メインヒロインのくせに、自分の都合次第でしか現われない仕方がない。今はツリーのことを諦めよう。

で、この半導体はどうするかな。

もしかしてトシユナにもあるのではと思ったが、まさか頭を割らせろと言えるわけもないし、頭部CTなんて高度な技はできっこない。

俺はただの内科医で、放射線科医ではない。ドラマで黒いX線写真をびらつと見ただけでなんだか判断しきる医者もいるが、あれはマジックだ。超能力だ。俺にできるわけがない。俺にとってX線写真の白い影は、全てがなんか結核にしか見えない。

しかし一つの結論はできた。

やっぱりここは人間が生きていた世界だ。

地球のどこかだ。

俺と同じ人間がどこに行ったのかはわからないが。

そっぴや見るからに地球生物らしい姿をしている。

SF作家が喜ぶような、目玉一個でヨダレを垂らした宇宙生物という面白くて奇抜な姿をしていない。

なにか地球の価値観が派生した姿をしている。

人間的価値観によって生まれた、便利な生物だ。

自然原理主義の元で進化したゴリラや人間がこうなるとは思えない。

なにか手を加えられたか、突然変異の結果だ。

「え、あ、あの。なんでしょうか。そんなに見つめられて……っ」  
まさかな。

俺がこんなのに進化する条件がわからない。

進化の正しい答えなんて、人類学者でもわかるものか。

「あ、あの、だから、私は夫のいる身で……っ！」

「喜ベトシユナ」

「は、はいっ！」

「彼らは助けられるかもしれないよ」

しかし人類と同じ構造だとわかれば、俺の出番である。

俺の医術が「呪い」に対抗できるかもしれない。

## KARTE 5 - 3 犯人推理

こいつらが俺と同じ人間であると過程した上で、ダーコが言っていた「呪い」という病気について、医者としての途中見解を述べる。

俺は症状が同じ患者の状態を、可能な限り記録した。

初めは酷い高熱。動けなくて幻覚を見るほどの高熱だ。

さらに多量の発汗、徐脈、バラ疹。

第二期は興奮とか、意識障害が見られる。

便は一日六回から十回。繫留熱けいりゅうねつから拡張熱に。

最後は吐血に水性の血便。

その後一旦熱が下がるが、こうなりやもうおしまい。

体が完璧に負けた証拠だ。

ちなみに拡張熱とは1 前後の起伏がある熱のことをいう。

敗血症になるとこのタイプの熱が出る。

説明の説明はややこしいが、敗血症は簡単に言つと、菌と戦う白血球を持った血液が、菌に敗北した症状である。血が菌の培養施設になったと表現してもいい。

「原因が消化器にたまつてゐるなら、腹を裂く必要もありそうだが…」

…

輸血技術でさえまともにできない世界だ。

やはり腹を開いて悪いところを治すなんて芸当はできないか。

もし消化管穿孔が起きたなら、物理的に穴を塞ぐのが鉄則だ。

できないとなると患者は絶望的である。

穿孔せんこうとは穴が開くという意味。

腸に穴なんぞ開いていたら、食事ができないどころの話ではない。

遊離ガスも発生したりと、かなり痛いはずだ。

ちなみに遊離ガスとは消化管外に逃げたガスのことである。

このような症状が、発熱から約一ヶ月の間で起こる。

その後は……、まあ運でしかないな。

解剖した結果、心室の肥大などは見られなかった。  
ダメージを受けるのは消化器官ばかりである。  
俺は腕を組んでうなった。

さあて、犯人は誰かな。

集団感染ということは、なんらかの原因がある。

つまり大量殺人の犯人がいるはずだ。

しかしちんたら考えている暇はない。

この話は刑事ドラマじゃない。医者の話だ。

待てば待つほど死人が増える。

それも指数関数的に。

犯行から時効、つまり殺害完了までは約一ヶ月。

しかも恐らく二週間も過ぎれば手遅れになるだろう。

猶予は二週間だ。

人間みたいに十五年もの余裕はない。

俺の頭が悪ければ悪いほど、多くの人を殺す。

さあ思いつけ。ひらめけ。捕まえろ。

誰がこんなことをしているのかを。

外科は人間の修理工。内科は推理探偵。

知識と発想力がないのなら、俺は内科医失格だ。

「特徴的なのはバラ疹か。ここからなにか捕まえられそうだな」

感染症の種類は絶望的なほど多くもない。

片っ端から検証すれば、そのうちに行き当たりそうだが。

「ここらへんにノミやネズミはいるかな」

トシュナにたずねる。

「ネズミってなんですか？」

が、返答は悲しいものだった。

仕方なく俺が絵に書いて、似た生き物はいないかたずね直した。

「そういうのでしたら、穴を掘れば出てくると思いますよ」

「よし。そいつでいい。罌をしかけて捕まえさせよう」

ノミやネズミは典型的な感染媒体である。

歴史的に有名な所じゃ、ペストなんかもネズミが感染媒体だった。欧米で多いライム病はマダニが原因だ。

そこらへんにいる小動物や虫を調べて原因を突き止めるべきだろうか。

俺は病人がいるという家々を回ってみた。

症状は皆似たようなもの。おまけに皆呪いだなんだと言って、金のある連中はやっぱり詐欺師こと牧師を雇い、わけのわからない薬を飲んだり、汚い水を傷口にかけたりしていた。俺からすればトドメを刺しているようなものである。

彼らの管理は俺一人じゃとてもカバーできない。

だからトシユナにもある程度任せているんだが……。

「トシユナ、あまり勝手に動くんじゃない」

彼女は思ったよりも自分勝手に動いていた。

俺の意図する範囲以上の仕事をしてしまう。

「ですが」

「患者がかわいそうなのはわかる。でもトシユナが倒れたら俺が困る。俺が困ったら、大勢が困るんだ。わかるな」

街にはとある縦長のテントがある。

俺はそこにトシユナが近寄らないよう指示していた。

テントに近寄るとわかる悪臭。うめき声。

貧乏人用の隔離施設である。

普通の人間ならゲロ吐いて逃げ出すような場所だ。

テントの中には左右に等間隔で並べられたベッドがあつた。

いや、ベッドといっても、ござレベルである。

ほとんど地べたに寝かされているに近い。

せめてもと下に枯れ葉が敷かれているが、良い状態とはいいいく  
い。

やはり便はそのまま垂れ流しだ。

一人一日十回の便を丁寧に始末するやつはいない。

医者でもなければ、中を覗いただけで踵を返すだろう。

このテント設営指示を出したのは俺である。

なんといつても感染拡大だけは防ぎたい。が、これはどうかと思う。

トシユナが懸命に世話をしているが、正直墓地手前である。

「隔離は正しい処置だけど、衛生状態が最悪だな」

俺は一旦隔離テントから離れ、ダークを呼び、話をつけた。

「便がそのままなのは特に良くない。下痢が酷いのはな、体が悪い菌を外に吐き出してるから、あんなに出まくるんだ。つまり便は菌の塊。ほうっておけば二次感染が起こる。原因はまだわからないが、少なくとも被害の拡大は防ぎたい」

「では神よ、我々はどうする」

「穴を掘って便を一カ所に埋めよう。もちろん健常者にも徹底させる必要がある。健康に見えても、実は発症するまでの潜伏期間だったりするんだ」

現代日本人からすれば、トイレの指導なんかしなくてもと思うかもしれないが、彼らが持つトイレの概念は軽薄だった。

桶にベツと出して、外にベツと撒く。

これじゃいつ人や食物にひっかかって、二次感染が起こるかわかったもんじゃない。

「重大な被害を出す感染症のほとんどは野ネズミやダニ、ノミが原因だ。駆除を徹底したほうがいいな。そうでなくても、菌をまき散らすキヤリアーになりかねない」

「よし。そのぐらいだったら我々にもできる」

「患者には十分な水分補給をさせるんだ。ただし全部一度沸騰させた水だぞ、生水だけは飲まずなよ。きつと新しい菌に対処できる抵抗力はないはずだ。もしかしたら日和見感染で死ぬ可能性もある」

日和見感染とは、体が弱っていて、本来かかるはずのない病気にかかることである。

水については俺が直接持ってきても構わないが、一人二人の病人相手ならともかく、住民全員を支えきる、なんて芸当はできない。

「すごいな……。我々にはどうして良いかまったくわからなかったのに、神は的確に我々を救ってくださる。やはりお告げは正しかった」

「人を救って当然だろ。だって俺はドクターなんだから」  
対処法を施しても、所詮は後の祭り。

真の問題解決は犯人が誰か突き止めることである。

ホームズか金田一ならそろそろなにか特定しているところだが、俺は一端の医者だ。

さっぱり思いつきもしない。

まあ金田一が医学に詳しいと思えないけど。

血液培養をしたい。

糞便も採取しておきたい。

証拠は山のようにある。必要なのは判断できる知識だけだ。

## KARTE 5 - 3 犯人推理（後書き）

推理パートです

そんなに難しい感染症でもなく、わりとポピュラーなもので、  
ちよつと詳しい人はすぐわかるかもしれません。

## KARTE 5 - 4 自分説教

日が暮れだした。

夜は働かない。体を休める時間だ。

昔は患者がいればいつまでも働く、なんてポリシーを持っていたが、その誓いを守り通りしておとずれたのは、自律神経の限界だけだった。神経の狂った医者は誰も助けられない。狂う手前でやめなければいけない。

患者をより多く助けるためにも、決めた時に決めた量を休む。

ここに俺の代わりはいない。

「トシユナ、いままでどこにいつてたんだ」

そして、彼女の代わりも。

日が暮れると、俺の目はとことん弱くなる。街灯なんてものはない。彼女が通信機器を持っているわけでもない。

そんななか、唯一の身内が見つからない。

俺は心底心配した。デパートで親を見失った子供のように泣いた。そしたらトシユナは満足そうな表情でやってきた。

「ネズミ、捕まえてきました！」

はあはあと息を整えながら、得物を自慢げに見せる。

人の足ほどある茶色い野ネズミ。知的な罠によって捕獲されたというよりは、鈍器のようなもので頭をたたきつぶされている。

検査するならばネズミである。

現地産のネズミならば、いろんな菌を持っているだろう。

だからネズミを捕まえようとは漏らしていたのだが。

俺は頭を掻いてため息を吐いた。

「いいか。はあ。もういい、わかった、一度話をしよう」

捕まえたネズミをスーパールの袋に突っ込む。

俺はトシユナを一旦自宅に連れ込み、説教をすることにした。眼鏡を外して、風呂場に戻る。

家に帰ったら必ず汚れを落とす。爪の間はブラシで洗うし、イソジンも使って菌を徹底的に落とす。ちよつとずつ説教をこぼしながら。

「熱心なのはわかる。けどなあ、やりすぎだ。病氣を持ったネズミに噛まれたらどうする。自分までおだぶつだ」

仏教用語をさらつと言つてしまったが、トシュナは水を浴びながら黙つて話を聞いていた。

後ろ姿は西洋彫刻の女性である。肌も白いし。

ぼんやりとした暖色の電球に照らされた、肌を滴る水は、どこか神秘的に見える。

顔を見なければ、思わず手が出てしまうような光景であるが、出したところで繁殖方法が違つのでどうしようもない。歯がゆいものである。

「はい……。わかりました……」

俺の愚痴めいた説教に、弱々しく反応するトシュナ。

しゅんとする……。というよりは、なにか言いたげであつた。

「あぶなっかしいんだ。今は良くても、そのうちどこかで悪い結果を起こす。死にたいのか君は。せつかく学んだ知識を無駄にするつもりか。君は大切な存在だ。いずれもつと、もつと、沢山の人を救う……。はずだから……」

俺は唇をひん曲げて押し黙つた。

誰に言っている言葉なのかわかりやしない。

トシュナに向けた言葉のほずなのに、一瞬で自分に戻ってくる。

この前まで死にたいと思つていたのは俺のほうだ。せつかく学んだ知識を無駄にしていたのは俺だ。まるで自分を叱っているようで気持ち悪い。

「すまない……」

俺は顔を逸らして謝つていた。

説教する威厳もなにもなかった。

落ち込んだ顔のまま、俺は衣服を丸めてゴミ袋の中に入れようと

した。

別に捨てるわけじゃない。洗濯機に投げ込むまでの防衛策だ。清潔さを保つというのは、簡単な作業のようで、実際はいろいろ難しい。汚れた手で少しでもどこかを触れば、それは不潔と見なされる。まるで「そこバイキン田中が触ったとこだぜ、えんがちょー」というぐらい、一度触った所は触ってはいけないのである。なんの菌を持ち込んでいるのかわからない以上、清潔さを保つのは最大の課題だ。

そしてこの作業は、そもそも手がなければできない話でもある。

「な、なんだ……？ またか？」

俺は自分の右前腕を凝視した。

手がまた消えていた。

今度は前腕で、手首から先がなくなっている。

あの幻覚だ。

一度目はびびったが、そう何度も起きられちゃ、俺だって慣れる。しかし痛みで目を覚まさせる手段は取りたくない。

風呂に入ってさっぱりすれば、そのうち腕も戻ってくるだろうか。という上手い話は存在せず。

「ドクター、その手どうしたんですか」

「なにが」

「右手、なくなってますよ」

彼女の一言は、俺を整理不能な混沌世界にたたき落とした。なんだって。

これは幻覚じゃないのか？

第三者の目から見ても手が見えないということは、俺の手は確実になくなっているということである。

まさか。俺の頭が正常であると認めたくない。

右前腕がないのが正しいと決定したくない。

「あ、ああ、これが……、これはあの、気にするな。事故だ。そ、そんなことより君だ」

俺は咄嗟に話題をすり替えた。

「しばらく家に帰ったらいい」

右腕を隠しながら、本題に入る。

トシユナは後ろを向きながら、ぴたりと動きを止めた。

「危険すぎる。あの場で積極的なのは評価されない」

「……ドクターは私がおじやまなのですか？」

いつもとは違う、あまりに冷たい声だ。

怒りと悲しみの境目に乗った声だ。

「じゃまなんかじゃない。むしろ必要だ。大切なんだよ」

便器の上に乗ったまま、俺はマジメに答えた。

「わかって欲しい。心配だから言ってるってことを」

「や、やめてくださいっ」

突然トシユナが声をあげた。

なるべく言葉を柔らかく言っていたつもりだっただけに、反論されて俺は驚いた。

「全部、ドクターのせいですから」

「は？ なんだって？」

「全部ドクターのせいですよ」

俺はトシユナを見下ろした。

トシユナは鋭い視線を俺にぶつけていた。

なにかを掴んだ揺るぎない瞳だった。俺にはない、熱い感情がそこにはあった。

「ただ生きて、ただ暮らす。家族がいて、ほんの少しの充実と幸せをもらう。その……、そのなんの意味もない生活をしていた私の前に、ドクターが現われて。そうしたら、今までの私の満足が、とてもちっぴけなものだったと知らされて」

トシユナの目尻に涙が溜まっていく。

「私は、私はヤリガイを見つけてしまったんです」

「やりがい……？」

「ドクターは言いました、私にヤリガイを見つけると。だから私は

見つけんです、誰からも感謝されることのなかった人生ではなく、人の命を救い、感謝される人生を。ヤリガイを見つけたんです。全部、全部ドクターのせいですよ」

トシユナは自分の腕で乱暴に涙を拭った。

そうして、俯いたままぼそぼそと喋った。

「ヤリガイなど、見つけなければよかった。ドクターが私に生きる意味を教えてしまったんです……。医療を施し、人を助ける意味と使命感、その価値を……。私に……。私は、とても楽しかった……。だからやめられないんです……。大切だなんて、言われたことないんですから……」

全ては俺のせい。

批難されつつも、罵倒されているわけではない。

俺は押し黙った。何かを言い返せる頭を持っていなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2069w/>

---

医者の俺は異世界で聖書（スマフォ）を片手に神と呼ばれる。

2011年10月7日06時59分発行